JAAGAだより

日米エアフォース友好協会
Japan-America Air Force Goodwill Association

発行:日米エアフォース友好協会
〒160-0002
東京都新宿区四谷坂町9番7号
ZEEKS四谷坂町ビル3F
編集:JAAGA事務局
印刷:アロー印刷株式会社
ホームページ:http://www.jaaga.jp/

齊藤治和新会長 就任挨拶
Gen. (Ret.) Harukazu Saitoh assumes President of JAAGA on 13 May 2019

2019年度の総会において、日米エアフォース友好協会(JAAGA :Japan-America Air Force Goodwill Association)会員の皆様方の承認を受け、岩﨑茂前会長に続く第11代会長として就任致しました齊藤治和です。

JAAGAは、航空自衛隊のOB及び賛同される会員の方々で構成する組織として、1996年の創設以来、空での活動を共に担う日米空軍種間における一層の協力と相互理解の増進に寄与すべく、各種の活動を行ってまいりました。

日本を取り巻く現下の安全保障環境は、創設時には到底考えられなかった様な格段の厳しい状況にあります。

そのような中にあって、我が国及び周辺における平和と繁栄の基礎をなすのは、より強固な日米同盟のもとでの双方の緊密な連携と調和であり、このために日々努力されている日米空軍種の現役隊員の方々の活動を様々な面から支援していく事をJAAGAの活動の目標としています。

平成から令和へと時は移りつつも、時代の環境等に合わせながら、航空自衛隊と米空軍との関係がより強固な紐帯を成し、日米双方の平和と繁栄に大いに貢献できるよう、会員の皆様のご尽力と各種活動への積極的なご参画をいただきますよう、お願い申し上げます。

令和元年5月13日
第11代 日米エアフォース友好協会会長 齊藤治和

2019年度(令和元年度)JAAGA総会等 開催
JAAGA Annual Convention held on 13 May 2019

2019年度**JAAGA総会**が令和元年5月13日(月)、グランドヒル市ヶ谷において開催された。引き続く**講演会**、**懇親会**には賛助会員の他、空自隊員及び米軍人等の招待者も加わり、整斉と一連の行事が実施された。 (早坂理事記)

JAAGA総会は15時から16時15分までの予定で開催された。福井副理事長の全般進行により開始され、先ず審議に先立ち、平成30年度にご逝去された2名の会員、故阿部博男氏(6月9日亡)及び故若江東美男氏(8月27日亡)の御冥福を祈り、全員で黙祷を捧げた。続いて、岩﨑茂会長の挨拶があり、参加会員に対し、2018年度もほぼ計画通りに事業が進捗した旨を報告すると共に、「JAAGAのメンバーは正会員261名に加え、個人賛助会員及び法人会員を加えようやく400名を確保しているが、まだまだ小さな会である。しかしながら小さいが故に血の通った運営ができていると考える。本日は、2018年度の事業報告及び2019年度の事業計

～ 「第56号」 目 次 ～

齊藤治和新会長就任挨拶……1
JAAGA総会……1
JAAGA講演会……2
JAAGA懇親会……6
在日米軍兼第5空軍司令官交代……8
マルティネス中将名誉会員に……9
AFAライト新会長就任……9
在日米軍兼第5空軍最先任下士官交代……10
コープ・ノース・グアム参加隊員激励……11
日米相互特技訓練支援……12
日米優秀隊員表彰……14
空幕部長等講演会……18
三沢基地研修……24
SPORTEX'18B……29
空自英語競技会米軍審査員の活躍……31
米空軍将校航空自衛隊勤務だより……32
2019年度事業計画……34
現役隊員の皆様へ・寄稿募集……34
令和元年度役員・退任者・新入会員……35
会員募集・編集後記……36

President Iwasaki presides over the meeting

画等について審議していただくが、参加会員の皆様の忌憚のないご意見を頂きたい」との挨拶があった。

福井副理事長から、本総会は、正会員総数(2019.5.13 現在)259 名の内、本総会出席者 68 名、委任状提出者 151 名の計 219 名をもって会則の規定により総会の成立要件を満たす旨の報告があり、議案審議、報告事項の順に審議等が進められた。

議案審議は、岩﨑会長が議長を務め、第 1 号議案(平成 30 年度事業報告)、第 2 号議案(平成 30 年度決算報告)、第 3 号議案(2019 年度事業計画(案))、第 4 号議案(2019 年度予算(案))及び第 5 号議案(役員の選任(案))の 5 つの議案について、担当理事による説明の後質疑応答が行われた。第 1 号議案については米軍基地研修の参加会員の現状、第 2 号議案については入会活動費の内容、第 3 号議案については中止事業(三沢基地所属米軍人及びその家族に対するねぶた祭り支援、大学生等の米空軍基地研修支援)や今後の新たな事業への取り組み姿勢、会員への入会手続き、会員の拡充策等について活発な質疑応答や提案が行われた。第 4 号議案以降の質問等は無く、第 5 号議案の新会長(齋藤治和氏)、新副会長(石野次男氏、福井正明氏)及び新監事(日吉章夫氏)の各役員の選任を経て全ての議案の審議が終了し、何れの議案も提案通り承認された。

最後に報告事項として、石野理事長から役員会で選任された新理事が報告され、総会の議事をすべて終了した。総会の締め括りとして、役員の新任者(会長、副会長、監事、理事)、全役員の所掌分担、三沢及び沖縄支部長・事務局長、役員の退任者、顧問の委嘱者・退任者が紹介され、出席者全員から温かい拍手が送られた。

総会は、定刻を約 5 分ほど超過し、16 時 20 分に終了した。 (早坂理事記)

Deliberation of Agenda among Regular Members

JAAGA 講演会
JAAGA Lecture held on 13 May 2019

「令和」に改元されて初めての JAAGA 主催講演会は、在日米軍司令官兼第 5 空軍司令官シュナイダー中将(Lt. Gen. Kevin B. Schneider)が「Stronger Together – Postured for a New Era(共により強く-新時代への姿勢)」の演題で実施された。

初めに、司会の平本理事から、シュナイダー中将は、指揮官として F-16 部隊飛行隊長、航空団司令官、南西アジア地域での遠征航空団司令官を歴任し、幕僚としては統合参謀本部、米空軍参謀本部、米空軍中央軍司令部、インド・太平洋軍司令部での勤務経験があり、本年 2 月に現配置に就かれたこと、3,800 時間以上の飛行時間を有する最上級操縦士であること、枢要な地位での勤務経験からアジア太平洋地域の戦略環境に精通していることなどが紹介された。

シュナイダー中将は、講演の冒頭、第 33 代航空幕僚長の齊藤元空将の JAAGA 会長就任への祝意と前会長岩﨑元空将への謝意を表され、JAAGA 総会で日米関係について講演できることが大変光栄で感謝している旨、日本語を交えて述べられた。そして、米国は良きパートナー国である日本と肩を並べて立ち、新天皇の即位と「令和」時代の幕開けを祝し、新時代に向かう新たな機会や挑戦に対応できる体制を作っていくと述べられた。

その後に続く内容は、①インド・太平洋地域内における安全保障上の脅威、②第 5 空軍兵士が航空自衛隊員と共に日本の防衛の為に共同で、航空・宇宙・サイバー等の分野において、各機能や相互運用性の向上にどのように努力しているか、③日本国内の米軍人は、国の要請があれば、日本防衛の為に命を捨てる覚悟であること、の 3 点について述べられた。

最後に、今後の脅威に備えて、米空軍と航空自衛隊の即応と共同が最高度に発揮できるよう引き続き意見交換して行く旨と、過去の日米同盟へ貢献してきた人々への感謝の意が述べられ、講演を終えられた。

(講演の概要は次のとおり。)

「Stronger Together－Postured for a New Era （共により強く－新時代への姿勢）」

講師　在日米軍司令官兼第5空軍司令官　中将　ケビン B. シュナイダー
Lt.Gen. Kevin B. Schneider, Commander of USFJ and 5th Air Force

【講演の概要】

本日、2019 年度 JAAGA 総会にて講演させていただくことは、私にとって光栄なことです。平成の時代が終わり、令和時代の幕開けというとても幸先の良い時期です。米国は、良きパートナー国である日本と肩を並べて立ち、新天皇の即位を祝福し、新時代へ向けた新たな機会と挑戦に対応できる体制を作ってまいります。

今回で3度目の赴任となった日本は、私の心や思い出の中にも特に思い入れのある場所であり、在住できることをとても嬉しく思っています。父は海軍将校で横須賀に勤務していたので、私が空軍将校として再度日本の土を踏み、本物の飛行機を操縦するとは私自身も想像できませんでした。F-16 の最先端戦術部隊と評価されていた三沢に赴任した若い頃、航空自衛隊との親密な関係の恩恵を受け、私は北日本の良好な訓練環境でトレーニングすることができました。

Large audience, of JAAGA members and active duty personnel of Koku-Jieitai and USAF, welcome the guest speaker ！

日米両国を取り巻く安全保障環境は急変し、多くの大きな課題に直面しています。中国、北朝鮮、ロシアは、長年に亘って地域の平和と安定の恩恵を受けてきましたが、この平和と安定をひっくり返す可能性を秘めた国々です。これが日米同盟がこれまで以上に重要である明らかな理由です。そして今、私が必要としているのが即応性に関わる皆様の支援活動です。この地域の脅威は非常に早い速度で進化しており、我々の部隊は常に最大機能

JAAGA moderator introduces Lt.Gen. Schneider's brilliant career and his third tour of operational assignment in Japan

Guest speaker Lt.Gen. Schneider gives a lecture on “Stronger Together-Postured for a New Era”

が発揮できる状態を維持して脅威を抑制し、あるいは戦い、勝つ必要があります。米国国家防衛戦略(NDS)を読むと大国間の競争に勝つには長期に渡る能力維持の必要性を感じます。NDS 及び日本の防衛計画の大綱(NDPG)は共に、地球規模の安全保障のより複雑化と国際社会の勢力均衡の変化を認識しています。中国とロシアが国際秩序に公然と異議を唱え戦略的競争を再出現させたことは、新たな特徴と言えます。この地域の平和と安全を脅かす明確な脅威の為に米空軍と航空自衛隊は常に最高レベルの即応可能態勢を維持し、危機のみならず複雑な様相の戦いにも勝つ必要があります。我々は、自由で開かれたインド・太平洋地域であるために米国の軍事的優位を更に強めて、太平洋空軍及びインド・太平洋軍をサポートすることに力を集中します。我々は継続して改革と実験、マルチドメイン指揮統制、戦域兵站や状況に応じた権限配分等を太平洋空軍と調整します。この努力は必ず報われると思っています。

結果的に、我々の万全の用意は抑止力を育みます。戦争を起こさない確実な手段は、必ず勝利するための十分な事前準備をすることです。第 5 空軍は兵士に危機的意識を醸成させ、インド・太平洋地域内の複雑な脅威環境に対応させる為の訓練を行っています。「VIGILANT SHOGUN」・「RESILIENT TYPHOON」演習は、我々の部隊がどの様な環境下でも戦域内を円滑に移動し、奪取し、維持し、自主的な行動を確実にできる為のものです。

我々が行う訓練と作戦は、我々の致命性（致死率）と即応性に直結します。即応性が不十分だと日本と日本国民の防衛、地域の平和と安全維持という我々の任務が達成できません。しかし、それらよりも断然に国際安全保障の大黒柱は、日米同盟関係とパートナーシップ・ネットワークです。過去 70 年以上、日米同盟はインド・太平洋

地域の安定と安全、経済的繁栄の土台であり、共有利益、共有価値観、安全保障の責務の上に成り立っています。また、この同盟関係は、透明性のある政府と透明性のある経済取引、市場や全ドメインへのアクセス、及び国の主権の尊重と保護という価値観を分かち合える人々の目印であるとも言えます。そして今現在、日米同盟は最強です。日々、難易度が増し続けている安全保障問題に直面するにあたり、必要不可欠な同盟です。

日米同盟の強さは、米国の NDS と日本の NDPG を見れば一目瞭然で、どちらも足並みがそろっているということです。日米両国は、①限定的な小規模緊急事態から高レベルの軍事衝突事態まで柔軟性をもって対応させる必要性を共通認識、②新しいドメイン（宇宙、サイバー、電磁スペクトラム等）を組み合わせたマルチドメイン・オペレーションに適応する必要性について考えが一致、③増加している非伝統的ドメインへの脅威に対して、既存の国家安全保障のパラダイムを変えるという構えで認識が一致しています。

日本を取り巻く脅威は急速に増大していますが、我々のリーダーや空軍兵士は単なる受動的観察者ではありません。過去 4 年間で隊員同士の心の絆や思いやりの精神は急速に強まりました。その成果として、人道支援／災害救助活動への支援能力と手強い敵と戦って勝利できる能力を強化できました。米国は最先端能力機能を日本に配備しており、同盟の重要性の表れであると同時に共に実戦さながらの訓練を行なえる機会を提供しています。共同演習等（KEEN EDGE、KEEN SWORD、COPE NORTH 等）を通じて兵士たちは結びつきをより一層強めています。もし要請があれば、我々は如何なる敵対者とも戦い、勝利する準備はできています。

インド・太平洋地域は、歴史的に見ても最も被害の大きい自然災害が多発する地域です。昨年、インドネシアの M7.5 の地震の際には、日米 C-130 輸送機は、兵站や USAID 支援物資展開にも協力することができました。

残念なことに、ここ数ヶ月の間に米国及び航空自衛隊共に航空事故により兵士を失いました。この様な出来事は、家族、部隊、即応性に多大な影響を与えますが、同時に危機の際には迅速に対応し、支援するという意欲と能力を際立たせます。私は、我々の友情の重要性と作戦調整能力についての考えが更に強くなりました。

現在実行中の多数の演習、実作戦、危機対応に加えて、我々の部隊は SME（Subject Matter Expert：専門家）を継続的に指導して、この地域における危機の能力やコンセプトや脅威について共通の理解を深めていきます。昨年第 5 空軍は、初の二国間の緊急事態対応意見交換会を開催しました。日米から約 50 名の専門家が参集し、相互運用性の向上、人道支援・災害対応を迅速に遂行する能力向上の為に意見交換をしました。我々は、これからもパートナーとして、「COPE NORTH」で航空自衛隊の緊急対応能力向上に向けて支援し相互運用可能な能力を開発していきます。毎年、第 5 空軍と航空総隊は、FETAT（Far East Tactics and Analysis Team：極東戦術分析チーム）二か国間ワーキンググループを継続して開催していきます。日米両国の軍事情報分析官と現場のオペレーターが一緒に集まり、日米両国の戦術作成に不可欠な敵戦術を分析します。今日の相互運用性と良好な関係は、全ての演習、実動、交流を通じて築かれました。数々の改善を実施しましたが、まだまだできることは沢山有りますし、するべきです。

“There are more than 50,000 U.S. military service members here in Japan, who will fight and die to defend Japan when necessary.
We are Allies, Friends, and Partners！ ”

将来を見てみると、統合航空運用、知識共有、軍事情報共有、宇宙、サイバー、兵站、施設・工兵等の能力を更に高め、強化する機会があることに興奮を覚えます。太平洋空軍は F-35 戦闘機を、ハイエンドの戦いに備える為に積極的に訓練や演習に取り入れています。戦いで成功を収めるには、航空機の機能・種類・機数をただ増やすだけではなく、戦い方そのものを変えていく必要があります。ACE（Agile Combat Employment：迅速機敏な戦力展開）の概念に磨きをかけていく中で、お互いの部隊が素早く、軽快に動けるために我々は TTP（Tactics Techniques Procedures）の造成段階で収集した教訓を航空自衛隊と共有します。第 5 空軍は、ISR（Intelligence Surveillance Reconnaissance）シンポジウムを今月末に横田基地で開催します。このシンポジウムは、戦域 ISR の関係者に現在及び将来の機能に関する共通認識を図るのが目的です。米空・海軍、空・

海自のメンバーが参加しISRの相互運用性に対する包括的、統合的なアプローチを確かなものにするのが狙いです。第5空軍と航空自衛隊は、これまでに学んだ教訓を日米双方のAOC(Air Operation Center)を通じて、ATO(Air Tasking Order)及びダイナミック・ターゲティング作成に生かします。将来を見据えて、日米同盟の進化を継続させ、益々複雑化する安全保障環境の数々の課題に挑み、この地域の信頼できる同盟国やパートナー国との連携を図っていきます。日米両政府は、自由で開放されたインド・太平洋地域を達成、維持すると同時に北東アジアにおける安全保障の課題に向き合うことは、日米同盟だけでは不可能であると理解しています。日本とオーストラリア間のすでに強固な関係に加え、日本はこの地域でインドなどとの新たな関係構築を模索し、パートナー国との関係構築というとても重要な役割を果たしています。

シナリオを用いた訓練、演習を行ない、競い、抑止し、そして勝利する能力を確実に保持しなければなりません。準備態勢を維持するには、戦って勝つ為の水準を高く設定し、徹底的に訓練することが必要です。私は、我々の訓練及び実動が地域社会に影響を及ぼすことを知っています。時には、準備体制維持力低下の犠牲を払いますが、我々はそれらの影響を軽減する努力をしています。我々は日本からのお礼や感謝を求めてはいません。我々の任務の意義とともに、益々複雑化するこの地域での即応性を維持するには、厳格に訓練し続けることが必要だということをご理解いただきたいと思います。我々は日本政府と密接に協力して、基地関連の問題を管理し、訓練と即応性と地域社会に関わる事項とのバランスを取る努力をしています。我々は、皆様が在日米軍の役割について、あらゆるレベルの政府関係者や地域社会への教育、変化する安全保障環境や部隊の致命性と即応性の

Question and answer session in a friendly atmosphere

1986年以来、米軍は統合的軍事力の構築に取り組んでいます。各軍種の文化や個性を維持しながら、効果的にマルチドメイン・オペレーションを行なったり、統合作戦を実行させる必要があります。戦争に勝つ為の鍵は「多国籍、統合運用作戦」です。インド・太平洋地域のパートナー・ネットワークの将来を見据え、訓練や演習を行なう際には、地域内の友好国や他軍種を取り入れることが重要です。これからの将来、共に何を成し遂げることができるかを模索する良い機会ですし、こういった過酷な訓練の機会によって最大限のレベルに達することができるのです。現在5万人以上の米軍人が日本国内にいますが、我々は国の要請があれば、日本防衛の為、命を捨てる覚悟です。我々は同盟国、友人、そして、パートナーです。

この地域での安全保障上の脅威に立ち向かうのに必要な最高レベルの準備態勢を維持するには、現実的な訓練が必要です。ただ日本国内にいるということだけではダメで、常に危機と紛争に備えておく必要があります。信頼できる戦闘能力とは、準備を如何にするかに依存していますから、部隊は紛争の範囲全体を含む最も複雑な

維持等の理解を深める良き伝道者であることに感謝します。これは私のとても大きな関心事項であり、皆様の支持が必要です。我々はこれからもこの件に関しては議論を継続し、即応性の必要性を一般社会へ訴えていくつもりです。

最後に一言、今後の脅威に備え、米空軍と航空自衛隊の即応と共同が最大限に発揮されるように訓練、演習を進化させる必要性を引き続き話し合っていきたいと思います。また、今日の我々があるのは、過去の空軍兵やリーダーの存在があります。皆様の過去、現在、そして未来の日米同盟への貢献に、心よりお礼申し上げたく思います。今回のイベントの調整をしてくださった谷井理事をはじめとするJAAGAの皆さまに重ねて御礼申し上げたいと思います。

「ゴセイチョウ　アリガトウ　ゴザイマシタ！」

＜質疑応答＞

Q1: 昨年、横田基地に配備されたCV-22オスプレイを全面的に受け入れている近隣自治体もあれば、不安に感じている人もいる。安心させるためにも、オスプレイをもっ

と定期的に飛行させるべきではないか？

A1: まず、日頃からの米空軍に対するご支援に感謝いたします。米側として、部隊の配置に関しては、脅威への即応性を維持したり、日本国内のいろんな状況が複雑に絡んでいることを踏まえて対応していることはご理解いただいていると思います。これを成功裏に維持していくためには、皆様のような方々からの協力が不可欠です。これからも、そのような事が維持できるようにご協力をお願いします。また、近隣自治体の皆様、私共へのご理解とご支援ありがとうございます。しかし、皆様のご支援は、横田基地近隣だけではなく、インド・太平洋地域全体の安定と安全に寄与しているということをご理解ください。

Q2: 講演の中で、日米が共同して速やかに作戦を遂行するのは大切なことだと述べられたが、横田基地で勤務する航空自衛隊員は、空幕長発行の身分証明書では横田基地の入門ができず、入門に時間がかかったり、非常呼集訓練をするにも早朝の入門ができないなどの制約がある。我等が「共に戦い共に死ぬ」という気概を持ってより密接にオペレーションをやって行くためには、横田基地の入門のあり方についてご検討いただきたいと思うが、如何？

A2: それらの件に関しては、持ち帰って検討し、入門のプロセスに関して改正すべきところは改正したいと思います。

（池田理事記）

New president Saitoh expresses our gratitude to Lt.Gen. Schneider

JAAGA 懇親会
JAAGA Annual Reception held on 13 May 2019

President Saitoh made a speech, “JAAGA was established in 1996, for the strong bonds between Koku-Jieitai and USAF. JAAGA is small organization, but then, we have a guts more than big one.”

総会及び講演会に引き続き、懇親会が 18 時 15 分から 19 時 45 分まで開催された。懇親会は、会員、招待・案内者、防衛省及び米空軍の現役等、220 名を超える関係者が集まり盛大に実施された。

齊藤治和新会長は最初の挨拶で、自ら来賓の紹介をした後「JAAGA は 1996 年 5 月に設立しました。当時は冷戦が終了した事もあり、国民の間に軍事力や駐留されている米軍の価値についての懸念が生じている時代でした。その時代でも米軍と自衛隊の強い絆は地域の安定に不可欠であると、23 年後の現在の緊張の時代を予見した当時の先輩は素晴らしかったと思います。JAAGA は総会員約 400 名の小さい組織ですが、心意気は決して大きな組織には負けません。我々は現役をしっかりサポートします。邪魔はしません。また、出来る事と出来ない事もあります。そのためには現役の皆さんとの意志疎通をしっかりとやって行きたいと思います」と述べた。

引き続き、来賓代表として防衛副大臣原田憲治衆議院議員、航空幕僚長丸茂吉成空将、宇都隆史参議院議員から祝辞を頂き、メインテーブルの来賓紹介、祝電紹介に引き続き、懇親(歓談)が開始された。JAAGA 会員や現役航空自衛官及び米空軍招待者との間で、友好親善の更なる発展の一助となる懇親が図られた。

(渡部理事記)

JAAGA holds a splendid party to deepen friendship and understanding between the member of Koku-Jieitai, USAF and JAAGA

在日米軍兼第5空軍司令官交代式
The U.S. Forces Japan and the 5th Air Force Change of Command ceremony in YOKOTA AB

Photos by Koku-Jieitai

"Because of the clear threats to peace and security in this region, we must maintain the highest levels of readiness to respond to any threat, any crisis, any humanitarian disaster." remarked the new commander

2月5日(火)、米軍横田基地において、米インド太平洋軍司令官ディビッドソン海軍大将(Adm. Philip S. Davidson)及び米太平洋空軍司令官ブラウン空軍大将(Gen. Charles Q. Brown Jr.)による執行の下、在日米軍兼第5空軍「Change of Command」式典が挙行された。同式典は基地内下士官クラブで行なわれ、駐日米国大使、在日米軍指揮官、横田基地所在の隊員、日本側からは、外務大臣政務官、外務省北米局長、統幕長及び空幕長はじめ各自衛隊指揮官等の現役自衛官、福生市長はじめ周辺自治体の長、米軍横田基地協力会関係者など多くの招待者が参列し、500名以上収容できる会場が満席となった。JAAGAからは、岩﨑会長夫妻、外薗顧問、片岡顧問、齊藤顧問、杉山顧問、石野理事長、福江理事、阪東理事、前原理事、池田理事が参列した。

在日米軍司令官及び第5空軍司令官の指揮権移譲は、マルティネス空軍中将(Lt.Gen. Jerry P. Martinez)から、在日米軍司令官旗がディビッドソン海軍大将に、第5空軍司令官旗がブラウン空軍大将にそれぞれ返納され、その後、両司令官から新司令官シュナイダー空軍中将(Lt.Gen. Kevin B. Schneider)に2つの指揮官旗が授与されて、厳粛裏に終了した。

Lt.Gen. Kevin B. Schneider
Commander, United States Forces Japan, and
Commander, 5th Air Force, Yokota AB, Japan

退役するマルティネス空軍中将はスピーチにおいて、参列者への感謝の意に続いて、在任中に関係した日米軍人、日米政府要人等、そして家族との思い出と、それぞれへの大きな感謝の意を伝え、「司令官としての勤務や統合任務の遂行に対して誇りを感じ、日本に住んだことも誇りに思っている」と述べた。

続いて、新司令官シュナイダー空軍中将は、参列者への感謝のあと、「この『Change of Command』という行事は、日米のパートナーシップにとっても、我が軍の戦闘能力向上にとっても重要な意義がある。家族のあらゆる犠牲とマルティネス前司令官からのエールに感謝する。『日米同盟』は、外交・経済・安全保障上重要であり、どんな困難な状況においても両国が向上に尽力し連携して取り組んできた様々なビジョンを、引き継いでいく。我が部隊が常に最高度に維持する攻撃能力は、抑止力として世界に発信し、シームレスに効果を上げている。この部隊の指揮を執ることを大変光栄に感じている」と述べた。そして最後に日本語で、「精一杯尽力してまいります。これからもご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いします」と締めくくった。

式典後の基地内将校クラブにおけるレセプションでは、シュナイダー新司令官夫妻が招待者一人一人と挨拶を交わし、終始和やかな雰囲気の中で各要人と交流していた。

(池田理事記)

Reception after the ceremony

第5空軍司令官マルティネス中将がJAAGA名誉会員に

JAAGA asked Lt.Gen. Jerry P. Martinez to be an Honorary Member

1月29日(火)、防衛省A棟17階応接室において在日米軍司令官兼第5空軍司令官ジェリーP.マルティネス中将(Lt.Gen. Jerry P. Martinez, Commander, USFJ and 5th AF)へのJAAGA名誉会員委嘱式が行われた。委嘱式には米側からマルティネス司令官、キム夫人(Mrs. Kim Martinez)、在日米軍副司令官マホーニ海兵隊准将(Brig.Gen. Christopher J. Mahoney, Deputy Commander, USFJ)等が出席、JAAGAからは岩﨑会長、小野田・山崎両副会長、石野理事長、福井副理事長、谷井・福江・福永各理事が出席した。

マルティネス司令官は米国空軍士官学校を1986年に卒業と同時に任官。C-17A、C-5B、C-141B、KC-135Rで4,000時間以上の飛行時間を持ち、2016年10月から在日米軍司令官兼第5空軍司令官、また2018年5月から2018年7月の間、太平洋空軍暫定司令官として勤務された。この間、在日米軍を代表して、日米安全保障問題の管理、統合・共同訓練の監督、日米地位協定の運用、戦闘即応態勢の改善、62,000人の軍人・軍属および42,000人の扶養家族の生活の質の向上に尽力された。

名誉会員委嘱にあたり、岩﨑会長からマルティネス司令官に対し、米空軍と航空自衛隊の相互理解と友好親善に寄与していただいたことへの謝意と、今後は名誉会員として日米両国の親善の架け橋になっていただくことを要望し、委嘱記念盾が贈呈された。

記念撮影の後、マルティネス司令官から「2016年10月に現職に着任して、これまで日本における職務と生活、文化をエンジョイすることができた。中でもJAAGAから学んだことはとても重要であった。改めて、感謝するとともにJAAGAの名誉会員となることを誇りに思い、感激している」とコメントをいただいた。

マルティネス司令官には、同日天皇陛下から旭日大綬章が授与され、この後、退役祝賀レセプションに臨まれた。そして2月5日に予定されている指揮官交代式を経て退役される。今後のお住まい等は未定とのこと。

JAAGA名誉会員は、今回新たにマルティネス中将が加わり19名となった。　　(福永理事記)

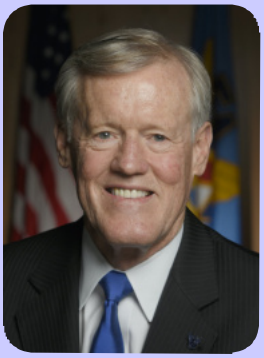
Lt.Gen. Martinez, Mrs. Kim, Brig.Gen. Mahoney, President Iwasaki, Vice President Onoda and Yamazaki, and JAAGA directors are in line

米空軍協会(AFA)新会長にライト名誉会員が就任

Lt.Gen.(Ret.) Wright, an honorary member of JAAGA, assumes the President of AFA

3月1日、米空軍協会(AFA)の新会長(プレジデント)に、JAAGA名誉会員であるライト退役中将(Lt.Gen. (Ret.) Bruce A. Wright)が就任しました。

ライト氏は、在日米軍作戦部長として3年弱、続いて第35戦闘航空団司令官として2年弱、日本で勤務した経験があり、そして、第5空軍司令官として横田基地での勤務(2005.2～2008.2)を最後に退官され、長らく米空軍と航空自衛隊の相互理解及び友好親善の増進に大きく貢献されました。退官後もJAAGA名誉会員として、JAAGA訪米団がAFA総会に参加する際には、一行をワシントンの自宅に招いて下さり、奥様とともに暖かく迎えて頂いております。この度の会長就任は、航空自衛隊と米空軍の絆がより一層強まることを予感させる誇らしい出来事です。ライト会長の御就任を心から祝福しますとともに、益々のご活躍を祈念致します。　　(清藤理事記)



Lt.Gen.(Ret.) Bruce A. Wright, an honorary member of JAAGA, will further strengthen the ties between Koku-Jieitai and USAF as the new president of AFA

在日米軍兼第5空軍最先任下士官交代式

Change of Responsibility ceremony

～グリーン最上級曹長 お疲れ様でした～

CMSgt. Greene was decorated with "the Defense Superior Service Medal"for his great achievements from Lt. Gen. Martinez.

11 月 28 日、横田基地において在日米軍兼第 5 空軍司令官マルティネス中将(Lt.Gen. Jerry P. Martinez)執行のもと、グリーン最上級曹長(Chief Master Sgt. Terrence A. Greene)の在日米軍先任下士官(USFJ SEL(Senior Enlisted Leader))兼ねて第 5 空軍最先任上級曹長(コマンドチーフ:5th AF Command Chief)の交代式(Change of Responsibility ceremony)が行われた。

グリーン最上級曹長は、これまで在日米軍 SEL と第 5 空軍コマンドチーフを兼務してきたが、在日米軍 SEL としての職務はワインガードナー最上級曹長(CMSgt. Richard L. Winegardner Jr.)へ、第 5 空軍コマンドチーフの職務はクルゼルニック最上級曹長(CMSgt. Brian A. Kruzelnick)へ、それぞれ引き継がれた。今回はじめて二人の先任下士官リーダーがそれぞれ職務を分担することになった。

式典を執行したマルティネス中将からグリーン最上級曹長へ防衛功労賞(the Defense Superior Service Medal)が贈呈され、訓示の中で、在日米軍 SEL と第 5 空軍コマンドチーフを兼務して、素晴らしい業績をあげた旨の紹介があり、このたび航空機動軍(Air Mobility Command:全ての大陸に展開されたグローバルコマンド)に栄転するグリーン最上級曹長にエールが送られた。

(以下、マルティネス中将訓示　要約)

「今日、私たちの司令部は変革を遂げている。今回、これまで兼任であった在日米軍SELと第5空軍コマンドチーフの2つが、はじめて、それぞれ別々の専任ポジションになる。我々はグリーン最上級曹長上番中の2年間、セキュリティ環境の変化が劇的であり、日本周辺の脅威は急速に成長していることを知ることとなった。今こそ、我々が在日米軍の即応性だけでなく、同盟国との相互運用性について注目し、日本の下士官たちとも協力して共同を確実にする時である。

ワインガードナー最上級曹長は、在日米軍SELとして、在日米軍下士官に関するすべての問題について司令官を補佐し、統合および共同の行動と訓練・演習を米国部隊、自衛隊および他の日本の組織と調整し、相互運用性及び日米同盟を強化する重要な任務を行う。

クルゼルニック最上級曹長は、第5空軍コマンドチーフとして、第5空軍の戦闘態勢、航空自衛隊及び他のパートナー諸国との共同に着意し、11,000人の下士官のレディネスをサポート、強化する。

グリーン最上級曹長は、日本での2年半の在任間、航空自衛隊准曹士先任と良好な関係を築き、日米下士官の特技能力の強化に努力し、相互の関係を強化するために精力的に活動した。今後は、航空機動軍のコマンドチーフとして、南北アメリカ、ヨーロッパ、中東、さらにはインド太平洋、さらに南極大陸で勤務するエアメン(Airmen)を担任する。」

グリーン最上級曹長は、航空自衛隊と第 5 空軍の間で実施され JAAGA が支援している日米相互特技訓練(Japan-U.S. Bilateral Exchange Program)が、多数の米空軍下士官からの参加希望があり、日米隊員相互に多くのことを学び、相互理解を深める上でとても重要な役割を果たしているプログラムであるという認識を示され、参加部隊の調整や参加隊員の選定などに尽力し、訓練の充実、進展に大きく寄与された。

グリーン最上級曹長の日本勤務における JAAGA の活動への協力に感謝し、今後の益々のご活躍を祈念します。　(福永理事記)

CMSgt. Winegardner takes over USFJ Senior Enlisted Leader, and CMSgt. Kruzelnick takes over 5th AF Command Chief, from CMSgt. Greene, who has fulfilled both responsibilities

グアムにおける日米豪共同訓練等参加隊員を激励
JAAGA cheers Koku-Jieitai participants to Cope North 19

1月9日(水)、石野理事長、小野・木村両理事が、13時15分から横田基地に航空総隊司令官武藤茂樹空将を、15時25分から府中基地に航空支援集団司令官山田真史空将(副司令官西谷浩一空将補同席)を訪ね、コープ・ノース・グアム(CNG: Cope North Guam) 19に参加する航空総隊及び航空支援集団の部隊に対するJAAGAからの激励品を手交し、訓練の成功を祈念した。CNGは平成11年度から始まり、豪空軍の参加や人道支援・災害救援(HA/DR: Humanitarian Assistance/Disaster Relief) 訓練を取り入れる等の変遷を経ながら毎年実施されており、平成30年度で19回目を迎える。

両司令官からは、「JAAGAの激励に感謝します。参加部隊にしっかりと届け、実り多き訓練となるように努めます。今後もJAAGAからの広範な御支援を期待します」と感謝の意が表明された。

JAAGA Chairman Ishino, Director Ono and Kimura call on Lt.Gen. Muto, Commander of Air Defense Command in Yokota AB on 9 Jan 2019

総隊司令部においては、目録贈呈を「日米友好だるま」が見守ってくれた。このだるまの目入れには米第5空軍も加わったそうであり、横田基地における日常的な日米友好・共同の様子がうかがえた。総隊司令官からは、「自身の勤務指針の一つに日米共同の深化を掲げており、参加した部隊にはしっかりと成果を残させたい。海外訓練参加は恒常的であり、隊員の英語能力・意識も高くなっている。ミッション・コマンダーをなし得る人材も育っている」との力強いコメントがあった。

支援集団司令官からは、「HA/DR訓練の成果は、先般のインドネシア共和国への国際緊急援助隊の派遣時にも活かされており、日米豪は現地で協力して速やかに活動を開始し、周囲の国がその姿に倣っている。日米豪の連携はより大事になってきており、現場で人間関係をしっかりと作り『信頼できる航空自衛隊』と彼らに認識してもらえるよう、訓練をきちんと誠実にやらせたい。英語については、高い能力が必要なミッション・コマンダーはしっかり養成する必要があるが、C-130の部隊については、海外での任務経験の積み重ねもあって能力が高く、心配していない。インドネシア国緊においても、彼らは逞しかった」と、訓練成果が実任務に遺憾なく発揮されている姿が披露された。

JAAGA Chairman and Directors call on Lt.Gen. Yamada, Commander of Air Support Command & Maj.Gen. Nishitani, Vice Commander in Fuchu AB on 9 Jan 2019

JAAGAとして、この様に自信と誇りを持って頑張っている現役隊員を支援できることは、ありがたいことである。

(木村理事記)

(訓練概要:航空自衛隊HPから)

CNG19は、「日米豪共同訓練による日米共同対処能力及び部隊の戦術技量の向上並びに人道支援・災害救援活動に係る米豪空軍との相互運用性の向上」を目的として、展開・撤収を含み2月7日(木)～3月19日(火)の期間、米国グアム島アンダーセン空軍基地、北マリアナ諸島サイパン島、テニアン島、ロタ島及びファラロン・デ・メディニラ空対地射場並びに同周辺空域において実施される。

このうち、グアムにおける日米豪共同訓練は2月20日(水)～3月8日(金)、日米豪人道支援・災害救援共同訓練は2月17日(日)～3月2日(土)の予定である。

両訓練を通じて航空総隊からは第8航空団(築城)、第9航空団(那覇)、航空救難団(入間)及び警戒航空隊(三沢)の人員約350名、F-15J/DJ×8機、F-2A/B×6機、U-125A×2機、E-2C×2機が参加、航空支援集団からは第1輸送航空隊(小牧)の人員約100名、航空機C-130H×2機、KC-767×1機が参加し、グアムにおける日米豪共同訓練では防空戦闘、えん護戦闘、対戦闘機戦闘、空対地射爆撃、電子戦、空中給油、戦術空輸及び捜索の訓練を、日米豪人道支援・災害救援共同訓練では航空輸送、不整地離着陸、捜索、航空患者搬送及び飛行場応急措置の訓練が行われる。

日米相互特技訓練に対する支援
JAAGA suppots Japan-U.S. Bilateral Exchange Program

平成30年度 日米相互特技訓練の実績 （空幕教育課提供）

空自受入基地 (training base)	期間 (period)	参加人員 (participants)	空自差出基地 (training base)	期間 (period)	参加人員 (participants)
浜松基地 (Hamamatsu AB)	2018.Jul.24 ～Jul.31	6	米軍三沢基地 (Misawa AFB)	2018.Jul.11 ～Jul.20	8
高良台分屯基地 (Kouradai Sub Base)	2018.Oct.9 ～Oct.16	6	米軍横田基地 (Yokota AFB)	2018.Sep.5 ～Sep.14	14
山田分屯基地 (Yamada Sub Base)	2018.Oct.17 ～Oct.26	8	米軍三沢基地 (Misawa AFB)	2018.Sep.18 ～Seo.27	7
防府北基地 (Hofu Kita AB)	2019.Feb.12 ～Feb.19	5	米軍嘉手納基地 (Kadena AFB)	2018.Nov.20 ～Nov.29	15

航空自衛隊と米空軍の間で大いなる成果を上げている日米相互特技訓練は、平成 30 年度は左表のように実施された。

JAAGAとしては、微力ながら現役を支援できる喜びを感じている。

平成 30 年度の最後となる日米相互特技訓練が 2 月 12 日～ 2 月 19 日の間、防府北基地において、米空軍第 374 空輸航空団の最上級曹長チーフ・ヤング以下 9 名（訓練者 5 名）を受け入れて実施された。大きな成果を得て訓練を終えることが出来たようである。

第 12 飛行教育団准曹士先任　石本准空尉から訓練所感を寄稿いただいたので紹介します。　（福永理事記）

CMSgt. Elvin L. Young Jr, Command Chief of 374th Airlift Wing, calls on Col. Hama, Commander of 12th FTW

訓練所感　Training Impressions
防府北基地（Hofu Kita AB）　第 12 飛行教育団准曹士先任
准空尉　石本　力

航空教育集団隷下の第12飛行教育団（以下「12教団」）は、2月12日から19日まで、防府北基地で「日米相互特技訓練（BEP）」を実施しました。

防府北基地における本訓練の受入れは12教団司令（浜1佐）指導のもと、対番隊員、地上教育班員、英語教官及び、12教団全隊員で対応しました。12教団では初めての受入れとなるため、すべてにおいて手探り状態ではあったものの、12教団の強みであるチームワークで受入れ準備を整え訓練当日を迎えました。

訓練初日は、本部庁舎前にて各群、所在部隊及び連合准曹会(北志会)の旗を振り、出迎えを実施しました。在日米空軍訓練参加者は予想以上の歓迎に少しびっくり(苦笑い)していました。今回の訓練は、在日米空軍第374空輸航空団の最上級曹長チーフ・ヤング以下9名（訓練者5名）での来基で、防府北基地は初めてということもあり、ヤング最上級曹長は、いろいろな意味での成果を期待していると私に言ってくれました。その後の12教団司令の表敬では懇談、記念品の交換を行いました。

その夜行われたアイスブレーカーでは両者緊張しているのかと思いきや、なんのなんの初めからエンジン全開？？対番者のコミュニケーション能力の高いこと、始まる前から飲んでたのかなと思うほど各テーブルから笑い声が絶えない状態でした。私は、この段階で訓練の成功を確信しました。

Icebraker on the first day

2日目は、訓練概要説明の後、日米双方の隊員による自己紹介（もちろん英語）を実施しました。この訓練を迎えるに当たり英語能力に関する本人の資質及び努力はもちろんのこと英語教官の適切な支援があったことがとても大きなレベルアップにつながりました。部隊施設見学においては、所在部隊である防府管制隊及び防府気象隊、また、陸上自衛隊第13飛行隊の支援を得て、基地の隅々まで案内をすることができました。

3日目～4日目、今日からが相互特技訓練の本番、それぞれの特技（飛行管理、航空機整備、電気、衛生、警備）において計画した訓練や他特技との合同で行う訓練等、いろいろ工夫をしていました。訓練の中で同じ特技ではあるものの日米の業務要領や考え方の違いを話し合い、それぞれの見識を大きく拡げることができました。また、休憩時間では食べ物や交友関係などの話をし、プライベート面でもお互いを理解することができました。

5日目は、山口県内の名所、史跡等の研修を実施しました。国内最大級の鍾乳洞「秋芳洞」や国宝である「瑠璃光寺五重塔」、そして日本三大天満宮の一つ「防府天満宮」を訪れ、郷土の歴史、文化に対する理解を深めていました。

6日目は、対番隊員と共に宮島の厳島神社を観光したり、J2「レノファ山口」のサッカー観戦に行ったりし、余暇を満喫しながら親睦を深めていました。

7日目は、訓練最終日とあって各職場で時間いっぱいまで情報交換を行っていました。午後からは、日米決戦防府カップ（バレーボール）大会を実施、僅差ではあったもののUSエアフォースに軍配が上がりました。夜は防府南基地の隊員クラブでフェアウェル・パーティーを行いました。私のつたない英語での挨拶で始まり、日米代表者による今回の訓練における感想を発表、続いてのギフト交換を行いそれぞれの思いを時間の許す限り伝えていました。

8日目、お別れの日、天候はみんなの気持ちを察してか大雨、一週間の訓練であったもののとても濃密な時間を過ごしたパートナー同士いつまでも別れを惜しんでいました。

在日米空軍訓練参加者及び対番隊員、それぞれの表情を見て改めて今回の訓練が各人にもたらした大きな成果を見て取ることができました。

最後に、この日米相互特技訓練を支援して頂いている日米エアフォース友好協会の皆様には心より感謝を申し上げるとともに会員皆様の益々のご健勝を祈念致します。また、あわせてこの訓練が大成功のうちに無事終了したことを報告いたします。

Good Training,
Farewell Smiles!

令和元年度　日米相互特技訓練計画（案）　（空幕教育課提供）

空自受入基地 (training base)	期間 (period)	参加人員 (participants)	空自差出基地 (training base)	期間 (period)	参加人員 (participants)
三沢基地 (Misawa AB)	2019.Aug.19～Aug.30	15	三沢基地 (Misawa AFB)	2019.Sep.13～Sep.22	15
大湊分屯基地 (Ohminato Sub Base)	2020.Jan.16～Jan.26	10	横田基地 (Yokota AFB)	2019.Sep.（調整中）	15
防府南・北基地 (Hofu Minami/Kita AB)	2019.Oct.～2020.Jan.（調整中）	10	嘉手納基地 (Kadena AFB)	2019.Nov.（調整中）	15
築城基地 (Tsuiki AB)	2020.Feb.～Mar.（調整中）	10	（参考）日米相互特技訓練のねらい 在日米空軍部隊での訓練を通じて、特技能力を向上させ、実務レベルにおける相互理解を深め、日米相互協力態勢の基盤を強化する。また、航空自衛隊の部隊における在日米空軍下士官の研修を支援し、受け入れ部隊隊員の特技能力向上を図るとともに、日米相互理解及び絆を深め、日米共同対処基盤を強化する。あわせて英語能力向上の動機づけとする。		
新潟分屯基地 (Niigata Sub Base)	2020.Feb.～Mar.（調整中）	10			

平成30年度 日米優秀隊員表彰
JAAGA AWARD for Koku-Jieitai & USAF Brilliant Soldier in FY 2018

平成30年度JAAGA日米隊員表彰式が、1月～3月にかけて那覇、横田及び三沢の航空自衛隊各基地において行われた。本表彰行事は平成10年度から開始されて以来21回目となり、表彰者数は総計149名（空自86名、米空軍63名）を数えた。（岩成理事記）

～日米優秀隊員の一覧表をP17に掲載～

― 沖縄地区表彰式 ―
Okinawa area (Naha AB)

1月31日（木）、平成30年度沖縄地区JAAGA表彰行事が航空自衛隊那覇基地で実施された。

表彰式は基地講堂において、祝賀会は基地隊員食堂において実施された。航空自衛隊からは南西航空方面隊司令官上ノ谷寛空将及び第9航空団司令稲月秀正空将補以下60名、米空軍からは第18航空団司令官カニングハム准将（Brig.Gen. Case A. Cunningham, Commander, 18th Wing, Kadena Air Base）以下25名、そして那覇基地協力者として那覇基地協力会レキオ・ウイング会長嘉手苅様他1名のご来臨を頂き、岩﨑会長及び丸野沖縄支部長以下6名のJAAGAメンバーを含めた総勢93名の参加者を得て開催された。

表彰式は、南西航空音楽隊による日米国歌の演奏から始まり、続く岩﨑会長の挨拶では、平素の我が国の安全保障への貢献に対する日米両部隊への感謝、本表彰事業の意義、被表彰者への祝意と感謝、そして本表彰行事に係る多くの関係者、特に那覇基地の積極的なご協力、ご支援に対するお礼が述べられた。

今年度の航空自衛隊側被表彰者は、第9航空団装備隊三浦智典2等空曹で、武器弾薬整備員として、嘉手納米空軍基地での移動整備等を通じて日米相互の特技能力向上に尽力するなどの功績が認められての表彰であった。

米空軍側被表彰者は第18航空団のアントニオ・アーノルド空軍中尉（1st Lt. Antoinio Arnold, 18th WG, Kadena Air Base）で、卓越した英語、日本語能力をもって、日米の重要な会議での通訳調整や英語競技会の審査、指導などの功績が認められての表彰であった。

岩﨑会長は日米の被表彰者に表彰状と記念楯を授与し、被表彰者の功績を称えた。

その後、航空自衛隊代表の稲月基地司令と米空軍代表のカニングハム司令官からご祝辞があり、日米両国の協調がこの地域の安定と繁栄に寄与していること、そして航空自衛隊と米空軍との間の絆強化の重要性、被表彰者の活動が仲間意識と団結を強化していることなど、被表彰者へのお祝いと敬意の言葉を述べられた。

祝賀会は、丸野支部長の挨拶、乾杯から始まり、日米出席者が終始和気藹々と受賞者を称える温かな雰囲気の祝賀会となった。最後に、第9航空団整備補給群司令岡本秀史1等空佐の納杯で締め括られた。

本行事にあたり、ご尽力いただいた那覇基地、嘉手納基地のスタッフの皆様に心から感謝申し上げます。

（岩成理事記）

At JAAGA Award Ceremony in Naha AB on 31 Jan. 2019, 22 people including President Iwasaki, Head of Okinawa Branch Maruno, Maj.Gen. Kaminotani, Maj.Gen. Inatsuki and Brig. Gen. Cunningham are in line.

― 関東地区表彰式 ―
Kanto area (Yokota AB)

2月8日(金)、平成30年度関東地区JAAGA表彰行事が航空自衛隊横田基地において実施された。

表彰式は基地講堂、記念植樹は基地内グランド周辺、祝賀会食は将官宿舎レセプションルームにおいて開催され、航空自衛隊からは、航空総隊司令官武藤茂樹空将及び作戦システム運用隊司令兼横田基地司令齋藤拓也1等空佐以下60名、米空軍からは、第374空輸航空団司令官ジョーンズ空軍大佐(Col. Otis C. Jones, Commander, 374th Airlift Wing, Yokota Air Base)以下20名、そして横田基地周辺協力者として横田基地協力会会長山下様及び横田基地OB会会長日吉様他のご来臨を頂き、岩﨑会長以下3名のJAAGAメンバーを含めた総勢85名の参加者を得て実施された。

表彰式は、岩﨑会長から、航空自衛隊及び米軍の活動に対する謝意と平素のJAAGAの活動へのご支援に対する感謝、そして本表彰行事に係る関係者、特に横田基地による積極的なご協力、ご支援に対する謝辞が述べられた。

今年度の航空自衛隊側被表彰者は、作戦情報隊生稲勇一空曹長(横田基地)、航空支援集団司令部熊野奏2等空曹(府中基地)及び第2輸送航空隊佐々木信吉准空尉(入間基地)の3名であった。生稲空曹長は、平成30年度横田基地准曹会副会長として、「スペシャルオリンピックス」等の運営に関し積極的な支援活動を行う他、横田基地米空軍柔術チームでの活動を通じて貢献したことが、熊野2等空曹は、第2航空団、航空総隊司令部及び航空支援集団司令部のそれぞれの勤務において、卓越した語学能力をもって大きく貢献したことが、また佐々木准空尉は、平成28年度入間基地准曹会会長として日米交流の機会を積極的に推進する他、「スペシャルオリンピックス」等でのボランティア活動を通じて貢献したことなどが受賞の理由であり、それぞれ日米各種交流行事での積極的な貢献や日米関連事業での活躍が認められたものである。

米空軍側被表彰者は、第374空輸航空団タカノ中佐(米軍横田基地)(Lt. Col. Kenji L. Takano, 374th Medical Group, 374th Airlift Wing, Yokota Air Base)であった。タカノ中佐は、航空医学交流事業の円滑な実施に寄与されるとともに、昨年入間基地で開かれた航空医学シンポジウムでは主要発表者として患者移送に係る相互理解を深めるなどの貢献が認められた。

岩﨑会長は、日米4人の被表彰者(作情隊生稲曹長は代理者)にそれぞれ表彰状と記念楯を授与し、その功績を称えた。続いて、齋藤基地司令及びジョーンズ司令官から、被表彰者を称える旨のご祝辞を頂いた。

その後、基地内グランド周辺にて、来賓及び受賞者の皆様、岩﨑会長などで記念植樹が行われた。

祝賀会食においては、まず山下協力会会長からご祝辞を頂くとともに乾杯の音頭をとって頂き、その後、4人の被表彰者から受賞の言葉が述べられ、それぞれ今回の受賞を光栄に思うこと、支えてくれた上司、同僚、家族への謝意、そして今後も一層日米関係強化のため尽力するとの決意が表明された。

平成30年度関東地区JAAGA表彰行事は有意義かつ楽しい雰囲気の中で幕が閉じられた。

横田基地のスタッフの皆様、大勢の基地隊員の皆様、ご支援をいただき、本当に有難うございました。

(岩成理事記)

At JAAGA Award Ceremony in Yokota AB on 8 Feb. 2019, 26 people including President Iwasaki, Lt. Gen. Muto, Col. Saito and Col. Jones are in line. (↓) Memorial Tree-Planting by participants

― 三沢地区表彰式 ―
Misawa area (Misawa AB)

3月6日(水)、平成30年度三沢地区JAAGA表彰行事が航空自衛隊三沢基地において実施された。

米空軍将校クラブにおいて表彰式、祝賀会が実施された。航空自衛隊からは北部航空方面隊司令官森川龍介空将、同副司令官熊谷三郎空将補、第3航空団司令兼三沢基地司令鮫島建一空将補以下50名が、米空軍三沢基地からは第35戦闘航空団司令官のストルーヴィ大佐(Col. Kristopher W. Struve, Commander, 35th FW, Misawa AB)以下40名が出席され、また三沢基地周辺協力者からは三沢市防衛協会会長野坂様他4名の皆様のご来臨を頂いて、岩﨑会長以下3名のJAAGAメンバーを含めた総勢90名の式典となった。

表彰式は北部航空音楽隊による日米国歌の演奏から始まり、続いて岩﨑会長が挨拶し、日本を取り巻く厳しい国際環境と信頼に基づく日米同盟強化の益々の必要性、日米の部隊の平素の活動に対する敬意と謝意、表彰行事の目的の紹介及びJAAGAの活動への積極的なご協力、ご支援に対する謝辞と今後なお一層のご理解、ご協力をお願いする旨述べた。

今年度の三沢基地における航空自衛隊側被表彰者は、第6高射群整備補給隊相畑茂2等空曹で、三沢基地2・3曹会会長として、アメリカンデーの基地見学ツアーやスペシャルオリンピックの運営支援等日米の様々な共同ボランティア活動等において大きく貢献するなどの功績が認められたものである。

また米空軍側被表彰者は、第35戦闘航空団のウィリアム・レイリー1等空兵(Airman First Class William Raley, 35th Figter Wing, Misawa Air Base)で、スペシャルオリンピックス、英語競技会など日米の様々な共同ボランティア活動等において貢献するとともに、戦術指揮統制能力の向上のために数多くのプロジェクトで貢献するなどの功績が認められた。

岩﨑会長は、日米の被表彰者にそれぞれ表彰状と記念楯を授与するとともにその功績を称えた。鮫島基地司令からは、被表彰者へのお祝いの言葉とともに、「三沢基地は日米友好を象徴する基地であり、友好親善に寄与した隊員を表彰してもらうことは、特に意義深いことである」との祝辞が述べられた。また、ストルーヴィ司令官からは、二人の被表彰者の功績を称えつつ、日米友好に努力している現場の隊員達をはじめJAAGAに対する謝辞が述べられた。

表彰式後の懇親祝賀会においては、三沢つばさ会会長の倉持様に、更なる友好親善を祈念して乾杯の音頭をとって頂いた。その後、日米の被表彰者から挨拶があり、今回の受賞を光栄に思うこと、支えてくれた上司、同僚、家族への謝意、そして今後も一層日米関係強化のため尽力するとの決意が表明された。

三沢基地の日米のスタッフの皆様、大勢の三沢基地隊員の皆様、大変お世話になりました。本当に有難うございました。　　(岩成理事記)

At JAAGA Award Ceremony in Misawa AB on 6 Mar. 2019, 23 people including President Iwasaki, Misawa Branch Secretary Yamamoto, Lt.Gen. Morikawa, Maj.Gen. Kumagai, Maj.Gen. Samejima and Col. Struve are in line.

― 受賞者及び功績の概要 ―
JAAGA AWARD 2018 Recipients and their Achievements

	部 隊	受 賞 者	功 績 の 概 要
空自 JASDF	第6高射群 （三沢） Misawa	 2等空曹　相畑　茂 TSgt. Shigeru Aihata	三沢基地2・3曹会会長として、アメリカンデーの基地見学ツアーやスペシャルオリンピックスの運営支援等、日米の様々な共同ボランティア活動等に貢献。 As the President of Misawa AB JASDF 2/3(T&S Sgt. Association), showed outstanding skills in various Japan-U.S. interchange activities, contributed to conducting activities of "American Day" base tour and the support for "Special Olympics".
	作戦情報隊 （横田） Yokota	 空曹長　生稲　勇一 CMSgt. Yuuichi Ikuina	横田基地准曹会副会長として、アースデイ、スペシャルオリンピックス、ストライダーズ駅伝、日米親善ボーリング大会の運営支援活動を行うほか、横田基地米空軍柔術チームに所属して米軍人との交流を深める等貢献。 As a Vice President of Yokota AB NCO Association, positively supported the administration of "Earth Day", "Special Olympics", "Striders Ekiden", "US-Japan Friendship Bowling", and as a member of the Jujutsu team of USAF in Yokota AB, contributed to enhancing the mutual understanding and friendship between JASDF and USAF.
	航空支援 集団司令部 （府中） Fuchu	 2等空曹　熊野　奏 TSgt. Kanazu Kumano	第2航空団、総隊司令部、支援集団司令部において卓越した語学能力をもって円滑に支援業務を実施したほか、日米共同訓練及び日米共同方面隊指揮所演習等の本部班員として積極的に語学支援及び広報支援を行う等貢献。 Demonstrated excellent English ability to achieve support role at 2nd WG, Air Defense Command, and Air Support Command, and positively conducted the interpretation and public affairs as a staff of joint exercise and bilateral command post exercise.
	第2輸送 航空隊 （入間） Iruma	 准空尉　佐々木　信吉 W.O. Nobuyoshi Sasaki	入間基地准曹会会長として　航空自衛隊准曹隊員と米空軍下士官の交流を積極的に推進するほか、ストライダーズ駅伝、スペシャルオリンピックス等ボランティア活動に邁進する等貢献。 As the President of Iruma AB NCO Association, enthusiastically promoted the exchange opportunities between NCOs of JASDF and USAF, also dedicated to the volunteer activities of "Striders Ekiden" and "Special Olympics".
	第9航空団 （那覇） Naha	 2等空曹　三浦智典 TSgt. Tomonori Miura	武器弾薬整備員として、嘉手納基地における移動整備や航空自衛隊と米空軍との場内救難訓練などに際し日米相互運用性に大きく貢献。 As a weapons ammunition specialist, contributed to ensuring Japan-US interpoerability in the field of mobility maintenance at Kadena AB and on-base rescue exercise between JASDF and USAF.
米空軍 USAF	第35 戦闘 航空団 （三沢） Misawa	 A1C. William Raley 1等空兵 ｳｨﾘｱﾑ ﾚｲﾘｰ	スペシャルオリンピックス、英語競技会など共同ボランティア活動や、戦術指揮統制能力の向上のために数多くのプロジェクトで遺憾なくその技能を発揮する等貢献。 Showed outstanding skills in contribution to supporting "Special Olympics", "Northern AC&W Wing's English Competition" and various projects to enhance bilateral tactical command & control capabilities.
	第374 空輸 航空団 （横田） Yokota	 Lt.Col. Kenji L. Takano 中佐 ｹﾝｼﾞ L ﾀｶﾉ	米空軍医官として、横田基地における航空医学交流事業の円滑な実施、入間における航空医学シンポジウムの主要発表者として患者移送に関する討議に参加、在日米軍が主催する共同航空医学相互運用性会合での企画業務を担う等貢献。 As a doctor of USAF, dedicated to carrying out "JASDF and USAF Flight Medicine Exchange Program" at Yokota AB, participated in "Aeromedical Symposium" at Iruma AB as a key speaker to discuss aeromedical evacuation, organized USAF hosting "Bilateral Aeromedical Interoperability Conference" and strengthened the interoperability.
	第18 航空団 （嘉手納） Kadena	 1st.Lt. Antoinio Arnold 中尉　ｱﾝﾄﾆｵ ｱｰﾉﾙﾄﾞ	日米防衛会議での相互交流、日米相互幹部グループの発展強化への貢献、航空自衛隊英語競技会の審査・指導を行うなど、航空自衛隊と米空軍との友好親善および相互理解の増進に貢献。 Contributed to promoting mutual understanding between JASDF and USAF, by conducting activities of "Japan-US Defense Conference", reinforcing the development of "Bilateral Leadership Officers Group (BLOG)", and providing support for "English Competition" of JASDF as a judge and an instructor.

JAAGA空幕部長等講演会
Lecture for JAAGA members on 22 Feb. 2019

2月21日(木)、小惑星探査機「はやぶさ2」がリュウグウ着陸に向けてホームポジションからの降下に入った中、グランドヒル市ヶ谷「芙蓉の間」において、「つばさ会／JAAGA訪米団」報告会(1310～1350)及び航空幕僚監部装備計画部長阿部睦晴空将補による「『進化』に向けた空自後方の取り組み」の講演会(1400～1545)が行われ、JAAGA会員70名(正会員47名、個人賛助会員5名、団体賛助会員1団体1名、法人賛助会員10社17名が聴講した。　(木村理事記)

【 つばさ会／JAAGA訪米団報告会 】

平田 JAAGA 副会長から平成 30 年度の訪米概要として、岩﨑 JAAGA 会長を団長とする 11 名の訪米団が 9 月 12 日に羽田を出発し、ハワイ州パールハーバー・ヒッカム統合基地(Joint Base Pearl Harbor - Hickam)に 3 日間(インド太平洋軍司令部、太平洋空軍司令部、ホノルル総領事公邸等を訪問)、ワシントン D.C.に 6 日間(JAAGA 名誉会員と交流、米空軍協会(AFA)コンファレンスに参加、空軍参謀本部及び統合参謀本部の部長等と意見交換、駐米大使公邸等を訪問)滞在し、21 日に成田に帰国した旨が説明された。

研修成果は 3 点に集約され、①関係者の献身的な調整、積極的な支援により、様々な教訓が得られたこと、②米軍人等との意見交換、AFA コンファレンスへの参加を通じ、米(空)軍の現状を確認するとともに、日本及び航空自衛隊に対する信頼と期待の大きさを痛感できたこと、③日米間の相互理解の促進に寄与できたことが述べられた。

引き続き、成果の細部及び各訪問先での活動内容が説明された。各訪問先での突っ込んだ意見交換の様子や、AFA コンファレンスにおいては 3 日間で 30 を超えるパネルディスカッション等に参加するとともに合間を縫って多くの軍人と意見交換したこと等、随所にエピソード等もちりばめられた立体感ある内容に、聴衆は頷いていた。

その中から、ワシントン D.C.での JAAGA 名誉会員との夕食会における日米代表の挨拶に、制服組 OB の交流が日米の信頼関係の維持強化に果たしている役割が端的に表れているので、ここに要旨を紹介する。

〈岩﨑会長〉

JAAGA 創立 22 年目、20 回目の訪米となる。JAAGA の訪米に際しての名誉会員の皆様の心温まるサポートに、改めて感謝する。JAAGA の目的は米空軍と航空自衛隊の架け橋になることであり、20 年間で多くの場所を訪問し各地で親しく意見交換してきた。米空軍と空自の関係は大変重要であり、今後も皆様には引き続き JAAGA の活動への一層のご理解とご協力をお願いしたい。

〈エバハート名誉会員(Gen.(Ret.) Ralph E. Eberhart)〉

JAAGA の訪米は、日米空軍の緊密な関係に計り知れない貢献をしている。「The Stars & Stripes」で日米の指揮官が隣り合わせに並んでいる写真をよく見かけるが、日米空軍の大変良好な関係がアジア太平洋地域の安定に寄与している。日米の空軍間の関係の更なる深化を願っている。

定刻に達し、時間的制約から質疑応答の時間は設けられず、多くの関係者の献身的な事前調整、現地での積極的な支援により円滑・充実した研修となったことに対し感謝の意が表され、報告会は終了した。

休憩に先立ち司会の平本理事から、ブルース・ライト名誉会員(Lt. Gen. (Ret.) Bruce A. Wright)が AFA プレジデントに就任したとのアナウンスがあった。

(木村理事記)

(訪米団の活動内容は、JAAGA だより第 55 号(平成 30 年 12 月 17 日)掲載記事「『つばさ会／ JAAGA 訪米団』AFA 総会参加等報告」を参照)

JAAGA Vice President Hirata made a report about the study tour of TSUBASA-KAI and JAAGA members, to PACAF, INDO-PACOM, APCSS, and Washington D.C.

【 航空幕僚監部装備計画部長講演会 】

冒頭司会者から、講師は補給、教育、開発等の幅広い勤務経験を有し、29 年 12 月から装備計画部長の職に就き現行中期計画事業の完成と新大綱の下での新中期計画策定等に空幕装備計画部門の責任者として日夜立ち向かっていること、及び、本日は 30 大綱、31 中期の内容を概観しつつ、空自の「進化」に向けた後方部門としての重要ポイントは何か、を中心に話される旨が紹介された。

講師から、JAAGA の支援・協力への謝意とともに、出身地である愛媛県今治市宮窪町（しまなみ海道の大島）は御影石の産地として有名である旨が紹介され会場の雰囲気が和んだ中、いよいよ本題に入り、防衛関係費の構造等専門的なことは素人にも分かるよう、重要事項はスライド脇まで移動して力説しながら、丁寧に説明が行われた。講話の概要は次のとおり。

Maj.Gen. Abe, Director General, Logistics Department gave a lecture for JAAGA members at the end of HEISEI era

～ 「進化」に向けた空自後方の取り組み ～
航空幕僚監部装備計画部長 阿部睦晴空将補

1 新たな防衛計画の大綱（30 大綱）の概要

始めに大綱本文にもある「従来の延長線上ではない真に実効的な防衛力を構築する」という観点から、今空自に何が求められているかについて、私なりの考えを簡単に説明する。

16 大綱まで踏襲されてきた基盤的防衛力構想は、22 大綱で「動的防衛力」、25 大綱で「統合機動防衛力」と形を変え、「平成 31 年度以降に係る防衛計画の大綱」（30 大綱）では「多次元統合防衛力」とされた。30 大綱は、NSC が設置され 25 大綱の時に「国防の基本方針」に代わり作られた「国家安全保障戦略」を前提とした上で実質的に初めて策定された大綱と認識している。NSC が中核となって作られ、我が国の防衛にとって何をなすべきか論理的に導かれたものとなっており、我々としては実現に向けて大きな課題を与えられたと考えている。特筆すべき点としては、新たな領域（宇宙、サイバー、電磁波）の優位性獲得の重要性とともに、従来の陸海空の区分から脱却した領域横断的な連携が求められている。（その他空自の将来体制についても説明）

JAAGA audience were affected by his enthusiastic lecture.

2 新たな中期防衛力整備計画（31 中期防）の概要

（計画の方針、計画の基本、31 中期防間における空自の主要な整備内容、基幹部隊の見直し等、領域横断作戦に必要な能力の強化における優先事項等、について説明）

従来からの変化事項として、中期計画策定後に防衛省から各装備品別の単価が別途公表されている。なお、空自関連の主な計画としては、F-35A×45 機取得のうち 18 機は、STOVL（短距離離陸・垂直着陸）機能を有する戦闘機を別途機種選定し整備する。また、宇宙・サイバー・電磁波領域においては宇宙状況監視システムの整備を、従来領域においては太平洋島しょ部への移動警戒管制レーダー等を運用するための基盤の整備やスタンド・オフ・ミサイルの整備等も計画している。

一方、常備自衛官定数等は、空自は平成 30 年度末の水準が目途とされ、部隊新編等は現在の定員を有効

活用しなければならない。

また、計画の実施に必要な防衛力整備の水準にかかる金額(所要経費)は概ね 27 兆 4,700 億円(平成 30 年度価格)が目途であるが、一層の効率化・合理化の目標額が 1.97 兆円であり、予算の編成に伴う防衛関係費は概ね 25 兆 5,000 億円程度を目途とすると定められている。なお、示される防衛関係費の規模について、今中期の「枠内」から 31 中期では「目途」となったものの、今中期の 7,000 億円の効率化要求に比し、31 中期ではその約 3 倍という大きな効率化が求められている。

3 「真に機能する航空自衛隊」を追求する上での課題

30 大綱で描かれた真に実効的な防衛力を整備し、「真に機能する航空自衛隊」となるためには、制約事項を含めいくつかの課題や問題も存在する。

"I insist that the balance between five points of view is very important."

その**第 1** は、少子化に伴う人口減少問題である。平成 22 年の 1 億 2,800 万人をピークに人口は減少フェーズに入っており、50 年後には約 4,000 万人減(30 %減)となる。「静かな有事」とも言われるとおり、今後 10 年間で総人口が 6 %減少するのに対し、募集人口である 18 歳人口は約 12 %と倍の勢いで減少し、募集環境は一層厳しくなる。真に機能する空自の追求に当たっては、①マンパワーの費用対効果の向上、②所属隊員を有効に活用できる組織・業務作り、が人的な観点において重要なポイントとなる。

第 2 に、予算面について考えてみたい。31 中期防において、防衛力整備の水準に係る金額 27.47 兆円、各年度の予算編成に伴う防衛関係費 25.50 兆円、及び事業に係る契約額 17.17 兆円という3 つの数字が示された。26 中期防間における防衛関係費は、24.31 兆円(人件・糧食費 10.70 兆円、一般物件費 4.95 兆円、歳出化経費 8.65 兆円)であり、新規後年度負担は 10.29 兆円であった。従って 31 中期防間の防衛関係費は 26 中期防間の同費に比し、防衛力整備の水準にかかる金額ベースで 3.16 兆円(13%)、各年度の予算編成に伴う防衛関係費ベースで 1.19 兆円(5%)、事業に係る契約額で 1.93 兆円(13%)、それぞれ増えている。しかし、人件・糧食費の伸び分や消費税増税分、更には 26 中期防間における新規後年度負担の歳出化経費上回り分を考慮すると、防衛力整備の水準に係る金額ベースでは 0.82 兆円(3%)の増となるが、各年度の予算編成に伴う防衛関係費ベースでは 1.15 兆円(5%)の減となる。また、事業に係る契約額においても消費税増税分を考慮する必要があり、これらを踏まえると、「見かけほど増えている訳ではない」というのが一つの見方であろう。

第 3 として、保有資産に係る状況を見てみると、施設を除いた保有資産は 10 年間で約 19 %増加しているのに対し、維持費は約 22 %減少している。新たな脅威に対応するため防衛力を急ピッチで整備した一方、維持費が追随できずややバランスを欠いた状況に陥っていることは、今後の留意すべきポイントである。

これら 3 点を踏まえると、今後を考える上で最も大切なことは、全体バランスを中核として各種施策を推進していくことに尽きるのではないかと考えている。作戦の推移への迅速な対応のため部分最適を追求しがちな空自にとって、「全体最適」は、決して簡単などではなく空自の組織文化を変えるほど大きな事である。この点を含めて「進化」する必要があると考えている。そして空自が真に機能するためには、我々後方も考え方を含めて変えていく必要がある。

「全体最適」に向けたバランスを確保するためには、少なくとも次の5つの視点が必要と考える。

(1)「航空」と「宇宙」と「サイバー」と「電子戦」

ややもすると、領域ごとに何をすべきかを考え、その結果を「ガチャッとホッチキスする」というやり方に陥りがちだが、4つの領域の整理に当たっては、資源が潤沢でないところも踏まえ少し見方を変え、「航空」を中核としつつ、それぞれの分野の良いところを活かしながら補完・融通し合い全体のバランスをとることで、互いに足を引っ張ることのないようにすることが大事である。

(2)「運用」と「後方」

インプットとアウトプットのバランスに係る課題は、現在空幕内では「予算と活動の乖離」と表現している(「予算と活動の乖離」のグラフを提示)。

よく、「後方の維持経費予算が少なく特別緊急請求が急増し、補給処において必要なものを買うことができない」、「予算が少なくても可動率は維持できている」というような話を耳にしたことがあるかも知れないが、実態を分析してみると、機関要求に対する査定を表す「予算確保率」に対し、設定した飛行時間に対する執行を表す「FH 執行率」を見てみると、FH 執行率の方が約 1 割上回ってい

ることが分かった。これは、空自がここ10年間ずっと、予算分より1割多い活動をしてきたことを意味する。加えて後方予算は査定どおり執行できるとは限らない中、当然そのような状況にも限界があるものと考える。このため「運用」と「後方」は真摯に向き合いバランスをとっていかなければならない。更には、意図しない航空事故等に対し予め予算要求することは出来ないことから、各種事故等によって本来計画に充当できる経費が少なくならないように努めていくことも忘れてはならないと考える。

(3)「部隊」と「企業」

後方活動は部隊(官)と企業(民)双方の取り組みをもって成り立っている。官民の役割分担はこれまで比較的安定して保持されてきたが、後方活動を取り巻く環境に応じて変化させるべきである。お互いのデメリットを補いメリットをより発揮できる様、後方活動における部隊と企業の役割のバランスを常に求めるべきである。

(4)「平時」と「グレーゾーン」と「事態対処」

年間の訓練所要を支援するのに必要な維持費を基準として予算要求を行っているが、平時からグレーゾーンに何時変わるのかは予期できず、グレーゾーンの所要が平時の所要を超える場合、そこをどう担保するのかという問題がある。より実戦的訓練に供しうるシミュレーターが発達してきたことや、FH経費の捻出が困難な状況を踏まえると、今後シミュレーターにより実機による訓練所要を代替していくことが考えられ、これによって平時の維持費は抑制できる。他方グレーやそれ以降の活動が更に大きい場合には、その超える部分を如何に確保しておくのかという点に関し、バランスを考えなければならない。

(5)「我が国自身の防衛体制」と「日米共同」と「安全保障協力」

課題の解決に向けて複数のアプローチが存在する中、まずは我が国自身の防衛努力をしっかり行った上で日米共同や安全保障協力と適切に組み合わせ、効果的・効率的に課題の解決や改善を図っていくアプローチの組み合わせについて、バランスを考えていく必要がある。

4 後方の取り組み

前述した**5つの視点を踏まえたバランス確保の観点に立った空自後方の取り組み**を説明する。

(1)意識の改革

個別最適の組織文化から全体最適追求型にシフトさせるためには、全体最適を考えることの有効性、必要性、重要性の意識を芽生えさせ定着させることが必須である。現在、TOC(Theory of Constraints:全体最適マネジメント理論)を活用した改善活動を、まずは後方分野を起点に推進している。TOCの活用とは、全体の中のボトルネック(制約)を見つけ、それに資源を集中して改善し、全体最適を達成することと理解している。民間では随分活用されており、米空軍でもその活用により後方支援のパフォーマンスが大きく改善された例がある。空自においても今年度から、後方業務をテーマに、TOCを活用した改善活動を導入すべく試行を開始している。まずはTOCの有効性を検証し、今後はTOCを活用した意識改革を実施できる人材の育成から開始に向けて取り組みを進めていきたい。空自のTOC活用は緒に就いたばかりだが、防衛装備庁の支援のもと29年度に2空団、2補で体験的に実施した。30～31年度は航空機整備関連業務において可動率向上のために各組織、各機能、官民がどのように努力を結集していくことが効果的であるかを主眼に、空自契約によって部外コンサルタントの支援を受けながら、2空団、2補、3補において所要の検証、検討作業を実施している。32年度以降は、後方業務全般において、必要な時期に必要な業務を対象としてTOCを活用した改善活動を実施できるよう、理論体系の理解促進に関わる人材育成を含め、持続的かつ独自に活動できる態勢の確立を図っていきたい。

"I think that Koku-Jieitai should reform the various consciousness for 'the best choice for all'"

(2)見える化

運用と後方のバランスをとる必要性を説明する際に使用した「予算と活動の乖離」のグラフを作成できるようになったこと自体が、運用側とキャッチボールしバランスをとるための「見える化活動」の一つと考える。少ない予算の中での後方活動は、次年度分を前借りしながら、例えば、IRAN機から部品を取り外して部隊に回し、年度末に納入された部品をIRAN搬出機に取り付けるというような、実に涙ぐましい努力をしながら、運用要求を支援してきた。ところがもう既に限界に近づいてきており、今後は経費の不足に伴い可動率がどんどん低下していくほど逼迫した状況にあるというのが後方の認識である。見える化を達成できれば、運用、後方が課題認識を共有できるため、予算と活動の乖離を改善する、即ち、運用と後方のバランスを全体最適という形で実現することが、理論的にはできると考えている。具体的には、運用と後方両方の

視点から相互の状況、課題を認識し、「目的意識」と「当事者意識」を共有することにより、適切なFHの設定と関係経費確保に向けた努力やシミュレーター等の活用にも代表されるようなFH関連経費の低減に向けた協力など、費用対効果の高い後方支援活動を実施していきたい。見える化のみではなく、運用、後方双方の対話やこれに資する継続的な評価、分析などの活動も不可欠な要素であり、それらにも取り組んで行くつもりである。

(3) 官民役割分担の見直し

部隊、補給処、民間企業がそれぞれ役割を分担することで、後方活動全体が構成されており、空自内部のみならず企業の経営環境など外部の環境変化も踏まえると、官民間または民民間での維持整備に係る役割分担における配分バランスの見直しも、今後は必要になってくるとともに、最終的には官民連携強化にもつながるものと考える。加えて国内企業は言うまでもなく、国外企業についてもイコールパートナーとしての役割分担を設定し、後方支援活動を一緒に出来る態勢づくりが必要である。例えば、修理、製造に関わる工程は全て民間企業が実施していたが、部品、材料の調達に長期間を要するものは官が事前に取得し官給することにより、全体のリードタイムを短縮出来るというアイデアがある。現在の契約方式（原価計算方式）では、原価に材料費も入っており、材料等を官給すると会社は利益が減る側面もあるかもしれないが、調達リードタイムの短縮は、民にはキャッシュフローが良くなり官にとっては後方が運用ニーズに早く対応できるという、双方にとってのメリットがあるので、官民連携のもと可能な限り取り入れることができるよう進めていきたい。

また、現在具体的に準備を進めている施策としては、航空機支援整備業務等の部外委託の拡大がある。人口減少による人材不足、自衛隊の活動領域の多様化により、より少ない人的資源で任務達成しうるかが、空自の一つの大きな課題になる。作戦運用には直結しない航空機の支援整備等を企業に委託する施策の拡大を進めているところである（T-3、T-7、U-680A、教育集団隷下のT-4の支援整備の部外委託状況について説明）。支援整備の部外委託については、範囲のみでなく委託要領についても見直しを図っている（IRANと同様の整備作業を現地補給処整備として部隊で行うT-400のオンサイト整備についても説明）。企業と空自はWin-Winの関係にならねばならず、互いにメリットがあるならば、従来のやり方にとらわれず、新しいやり方を追求していく。このためには民間企業と空自が一体となって目的を達成するべく、目的意識と当事者意識を共有し、甲乙の関係から脱却し、イコールパートナーとして補給処機能の全体最適の実現を図り、費用対効果の高い後方支援活動を目指したい。そして平時から有事まで切れ目がない後方支援を実現するための更なる全体最適への足がかりにもしたい。

なお、官民の役割分担を見直す上では、空自後方組織についても適切に見直す必要がある。空自の「サプライチェーン」を機能別に表示すると、予算要求に始まり、所要量の算定、取得、保管、配分、輸送、整備、処分という一連のフローの中で、多種多様な物品が流れ、循環している。このような中、各業務の実施者は隊員でなければならないのか、会社への情報提供により補給処の資材計画業務の大部分は民間でも出来るのではないか、更には民間の倉庫や輸送力等をもっと活用できるのではないかという観点で、後方組織全体を見直す必要がある。

更には新規装備品の多くはシステムが統合され現行の空自特技職の区分では適応できなくなっている場合があり、新機種導入に合わせて航空機整備員等の整備範囲を拡大させていく（F-35A、C-2、KC-767、E-767、KC-46Aを対象機種としたマルチAPG、マルチアビオについて説明）ことも、全体の資源、人の活用上避けては通れない問題である。一方でこれまでの特技職の区分が適した航空機もあるので、そのバランスを考えながら進めていくことが大きなポイントである。

(4) 可動と稼働

平時の能力をもって、グレーゾーンはもとより有事にも対処できるようにしておくことが重要である。そのためには、保有機の中でどれだけが「可動」できるのかということだけではなく、保有機をどれくらい「稼働」させるのかという活動量にも着目する必要がある。つまり、平時における活動量とグレーゾーン以降の活動量に差があるならば、その差分を念頭においた維持整備・備えを行っておく必要があり、運用を担う統幕とも連携してしっかりとした備えを実施していきたい。

(5) 3つのアプローチ：「我が国自身の防衛体制」と「日米共同」と「安全保障協力」

「弾」は自分たちで作って持っていれば良いが数年後

“I dedicate myself for Koku-Jieitai to function ‘truly’！”

更新しないといけないので、一定の数しか効率的には持てない。いざ必要という時に、米軍に本当に依存しきれるのか。米国以外に求める必要がある時に、使えるミサイルをどうやって確保するのか。現在、日英で新たな空対空ミサイル(JNAAM)の共同研究を進めている。自国だけでなく日米だけでもなく、他の国も含めて、一番困っているところをどう確保するかという視点でアプローチの組み合わせのバランスをとっていくことが必要である。あくまでも一例だが、ACSAが様々な国との間へ拡大されていく流れの中で、このバランスの観点に関しても色々な施策を進めていきたいと考えている。

JAAGA President Iwasaki shakes hands with Maj. Gen. Abe for thanks.

5 結言

新大綱、中期防の策定を受けて、限られた資源の中で空自は大きな変化をスピーディーに行うことが求められている。また、新たな領域だけでなく、空自がかつて経験したことのない既存の領域における運用態勢の整備(STOVL機の運用等)についても取り組む必要がある。この様な中、「全体最適に向けた意識改革」を推進し、速やかに現状の後方支援態勢の機能回復を図り、足下を固め、「真に機能する空自」の実現に寄与していく所存である。真に機能する空自実現のためにはバランスをとることが重要と冒頭申し上げたが、その全体最適を進めていく中で重要になってくるのが、「目的意識」と「当事者意識」である。時代は変われど、働くのも問題解決するのも人であり、空自が昔からずっとやってきた隊員を育てていくということに、「意識改革」という着意をもって、より精進していきたい。

講話に続き、2名の正会員から、空自後方の窮状は努力によって解決するレベルを超えていると思われるので実情を訴える必要性があるとの意見、及び、F-35A取得数とF-15の関連性に関する質問がなされ、講師は適切に応じた。特に前者については、予算構造を含めてしっかり理解してもらえる努力をする必要性とともに、一方で、厳しい安保環境下で正面装備に目が行くのは致し方ないので、現行程度の後方経費で何とかやっていける道を探すことも大切であるとの認識が示され、シミュレーターを活用したFHの低減や、官民の役割分担等、色々なことを同時並行的にやっていくことが必要である旨、再度強調された。

約10分間の質疑応答の後、岩﨑会長から、講師の分かり易く丁寧な講話に対する謝意、厳しい後方経費の中で知恵を絞り、より実効性のある真に戦える空自を作って頂きたいとの激励、今後とも空自のためにJAAGAとして出来ることをやっていくので色々な意見をいただければありがたいとの希望を込めた挨拶が行われ、最後に握手が交わされ、満場の拍手をもって講演会は閉会した。

(木村理事記)

作:宇山佳男OB

平成30年度JAAGA三沢基地研修
JAAGA Members' Visit to MISAWA AB on 27~28 Feb. 2019

JAAGA会員による三沢基地研修が2月27日(水)、28日(木)に実施された。研修団は、正会員の福井正明氏を団長に、副団長は個人賛助会員の中西康雄氏と法人賛助会員の石橋寛幸氏の両名のもと、三沢からの参加者1名を含め、正会員4名及び賛助会員24名(個人9名、団体1名、法人14名)、総勢28名が参加した。研修者は東京近郊からの他、遠く沖縄県や石川県からの参加者もいた。JAAGAからは平本、岩本、吉川、早坂各理事の他、三沢支部から山本事務局長が研修支援のため随行した。

(←)Formation ceremony of " Tour of Misawa AB Study for JAAGA member " at Iruma AB
(↑)Lt.Gen. Masuko, Commander of Central Air Defense Force welcomes JAAGA tour member at Iruma AB
(→)Boarding on C-2, New Air Cargo of Koku-Jieitai

研修初日は8時50分に入間基地稲荷山門に集合、入間基地車両で空輸ターミナルに移動し、航空機搭乗手続き後に結団式を行い、本研修を開始した。同ターミナルにおいて、中部航空方面隊司令官増子豊空将及び中部航空警戒管制団司令兼入間基地司令景浦誠樹空将補等基地所在主要幹部から、団長・副団長との懇談及び研修団の見送りを受けた。ほぼ定刻の10時頃、C-2型輸送機で三沢に向け移動した。機内は搭乗員と少量の貨物の他は研修者のみで、その広い機内空間に圧倒されつつも快適な空の旅となった。また、真新しい操縦席の見学も許可され、研修団に大好評であった。

(↑)Courtesy call on Maj.Gen. Samejima, Commander of 3rd WG and Misawa AB
(↓)Enjoy lunch with Lt.Gen. Morikawa, Commander of Northern Air Defense Force, and Koku-Jieitai members at Misawa AB

三沢基地到着後すぐに、エプロン地区に移動し、寒風の中、空自最新鋭のF-35A戦闘機の離陸風景を見学した。その後、研修団は三沢基地幹部食堂において、北部航空方面隊司令官森川龍介空将はじめ三沢基地所在の空自主要幹部との昼食会に参加し、空自幹部との懇談や心のこもった美味しい食事に舌鼓を打ち、研修初日の緊張も間もなく解れたようであった。

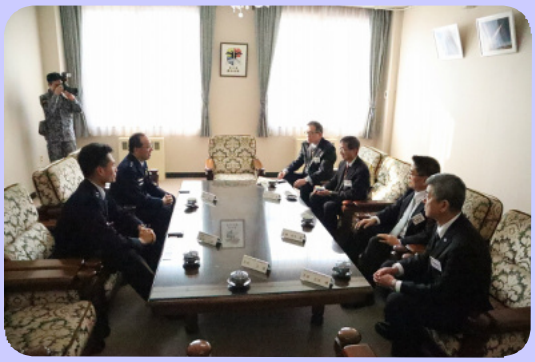
午後からは、早速、第3航空団の研修が行われた。まず、団長以下代表5名が第3航空団司令兼三沢基地司令鮫島建一空将補を表敬し、研修団受け入れの謝意を表した。その後、鮫島基地司令から基地概況説明を受けた。説明においては、基地沿革や米軍基地の中に所在する基地の置かれた特性、米軍及び地元三沢市をはじめとする自治体との三者共存をモットーとする良好な関係維持、空自隊員は米軍人との間で訓練や各種イベント等の交流を積極的に行い日米共同の実を上げている旨、更には、F-35A戦闘機部隊として、2月には302飛行隊が編成を完結し、2020年度には更に1個飛行隊が新編予定である旨の説明があった。続いて研修団は格納庫に移動し、F-2戦闘機及び搭載弾薬等並びにE-2C早期警戒機を見学した。研修員は共に機体等を間近に見ながら詳細な説明を熱心に聞くと共に、説明隊員の許可を得ての写真撮影を楽しんだ。なお、E-2Cの説

Maj.Gen. Samejima presents a brief " Outline of Misawa AB, Koku-Jieitai "

Group photo in front of F-2A(↑) & E-2C(↓)

明時に、飛行警戒監視群司令有馬元 1 等空佐から現在の我が国の置かれた周辺空域の軍事情勢に対応すべく三沢基地（第 601 飛行隊）と那覇基地(第 603 飛行隊)に配備された警戒機の運用に取り組む姿勢や工夫について言及があり、研修員の関心を大いに誘った。

第 3 航空団研修を終了後、団長以下代表 5 名が北空司令官森川空将を表敬した。懇談の中で森川司令官からJAAGAの空自への支援に対する謝意が表され、特に優秀隊員は隊員の士気高揚に資するところ大である旨のお言葉があった。その後、3 空団庁舎に移動し、北空司令官講話を聴講した。講話は、F-35A 戦闘機の受入状況、日米共同の現状及び女性自衛官の活躍等について行われた。F-35A のパイロットと整備員の教育は、すべて基地内において最新鋭の eラーニング・システムを主体に行われており、新大綱の下での大幅な機数増にしっかり応えていく所存である旨、また、日米共同については、既存の統合演習や特技訓練の他、北部航空方面隊独自に行っている共同訓練にも言及があった。更に、女性自衛官の活用を促進する施策については、三沢基地における緊急登庁支援についての説明があった。質疑応答においては、F-35A 機数増への対応如何との質問に対し、森川司令官から、①F-35A 以外の戦闘機を含めての戦力の最大発揮を行うための効率的な運用方法の開発、②F-35A の要員養成をどの様に講じていくのか、の 2 点が大きな課題であるとの回答があった。



Courtesy call on Lt.Gen. Morikawa and Maj. Gen. Kumagai, Vice Commander of Northern Air Defense Force

Group photo of JAAGA Study Tour Members with Lt.Gen. Morikawa, and Maj.Gen. Samejima

北空司令官講話の後、代表 5 名が米空軍第 35 戦闘航空団司令官クリストファー・W・ストルーヴィ大佐（Col. Kristopher W. Struve, Commander of 35th FW）を表敬した。歓談の中で、ストルーヴィ大佐からは、日本の勤務は 4 回目で約 8 年間に及ぶ日本滞在の経験があり、日本を第 2 の故郷だと思っている旨の自己紹介があった。

研修団は、3 空団研修を終え、当夜の宿泊先であり、楽しみにしていた基地内の米軍外来宿舎「三沢イン」へ移動し、18 時からの JAAGA 主催の夕食会を待った。三

(←)JAAGA hosts Dinner with Commanders of Koku-Jieitai & USAF at Misawa AB
(→)Tour members enjoy "Second party" after dinner at Kanpai room

沢インは、部屋は堅牢で何から何までいささか大きめのサイズであり、アメニティーも充実していて、いかにも米軍宿舎らしさを感じた。

18 時から開始された米軍オフィサーズ・クラブにおける JAAGA 主催夕食会には、空自からは森川北空司令官、同副司令官熊谷三郎空将補、鮫島基地司令、北部航空警戒管制団司令坂梨弘明空将補等の基地主要幹部及び北部航空方面隊准曹士先任香山博則准空尉、米空軍からはストルーヴィ司令官、第 35 戦闘航空団副司令官ポール・D・カーミス大佐（Col. Paul D. Kirmis, Vice Commander of 35th FW）、第 35 医療群司令テレンス・T・カニングハム大佐（Col. Terence T. Cunningham Ⅳ, Commander of 35th Medical Group）他戦闘航空団主要幹部及び第 35 戦闘航空団最先任上級曹長ジョン・C・アルスヴィグ（CMSgt. John C. Alsvig, Command Chief 35th FW）が参加した。参加者は 8 個のテーブルに分かれ、豪華な夕食に舌鼓を打ちながら、時折大きな歓声や笑い声が上がり、会場は終始和やかなムードに包まれていた。夕食会における福井団長の歓迎挨拶においては、「本日は、ハノイでの米朝首脳会談の最中であり東アジア情勢に大きな変化なく、ゆっくりと夕食を楽しむことができるだろう」とのジョークを交えながら、研修団の受入への謝意と共に、明日の米軍研修を楽しみにしており、この夕食会が日米共同をさらに深化させる良い機会であることを祈念する旨述べられた。森川司令官からは、日米両空軍の関係が更に良好でありより強い絆で結ばれることを祈念する旨、更にストルーヴィ司令官からは、JAAGA 歓迎の意と夕食会への招待に対するお礼の言葉があった。また、鮫島司令の乾杯発声では、JAAGA の日頃からの支援に対する謝意や日米優秀隊員表彰が空自隊員にとって大きな励みになっている旨の挨拶があった。今回の研修においては研修員の三沢基地外の外出が控えられたため、同クラブの「Kanpai」ルームにおいて研修員のみの 2 次会を開催することになったが、研修員相互の親睦に大いに効果があり、本研修に華を添えることになった。

研修 2 日目は、午前中に米空軍を研修した。9 時から約 30 分間、第 35 戦闘航空団司令部においてストルーヴィ司令官から状況説明を受けた。三沢基地内においては米陸海空3軍や空自との関係に限らず、三沢空港（日本航空）ともパートナーとして良好な関係を築いていること、第 35 戦闘航空団の任務や即応体制維持のための各種訓練・演習、共同作戦及び三沢対地射爆撃場での訓練状況等について説明の他、米軍への理解を深めてもらうため地域との交流を重視していること、JAAGA の日頃からの米軍に対する支援に感謝していることなどについて、時折ジョークを交えながら幅広い観点からの説

Courtesy call on Col. Struve, Commander of 35th FW

Col. Struve, gives a brief "Outline of 35th FW & Misawa AB, USAF"

Tour members seriously observe the demonstration by the member of Medical Group, 35 FW in the Base Hospital

Taking photo with Col. Struve on a F-16

Studying with a surprise look at Engine Test Stand

明が行なわれた。9時30分からは、第35医療群病院内においてその概要説明を受け、次に病院内の施設の見学が行なわれた。病院はシェルターによって外部と隔離され核攻撃にも耐えられる構造になっていることや、通常約400名のスタッフによって病院が維持運営・管理されており、昨年は160名の出産や540名の手術が行なわれたことなど、また有事は大量の患者が運び込まれた際のトリアージが行なわれる施設を有し、年4～5回の訓練が行なわれている旨の説明があった。また、病院見学の終わりにカニングハム医療群司令からスナック菓子のサプライズ・ギフトがあった。その後、研修団はA、Bの2グループに分かれ、格納庫でのF-16戦闘機及び搭載武器の研修とエンジン小隊におけるエンジン整備施設やエンジンテストの模様などを研修した。研修の説明に当たった軍人の中には日本での勤務経験が豊富な者も多く、日本語でのジョークも飛び出すなど終始和やかな雰囲気での研修となった。米軍施設研修の間は、Aグループには常時、ストルーヴィ司令官とアルスヴィグ最先任上級曹長が、そしてBグループにはカーミス副司令官が立ち会われ、我々研修団の様子を確認しつつ適宜説明にも加わり質問にも応じられていた。

米軍研修を終えた後は三沢基地内のレクリエーション施設であるゴルフコース内のプロショップに立ち寄り、その後、空自隊員食堂で昼食を体験喫食し、全ての研修の主要プログラムを無事終了した。

当日午後の帰路も計画ではC-2輸送機を予定していたが、都合により千歳～入間直行の定期便を三沢基地経由に変更してC-1輸送機で入間基地に向かうことになり、往路のC-2輸送機との比較を体験でき、空自の輸送能力の発展向上の様を実際に身をもって体験することが出来た。

Mr. Fukui, team Leader declare dissolving formation of “Study team” at Misawa AB

解団式は三沢基地空輸ターミナルにおいて行なわれ、福井団長から「本研修に当たって、三沢基地の日米双方の部隊から万全の態勢で迎え入れて頂き感謝に耐えない。研修団の皆さんも積極的に研修に臨まれ多くのものを得ることが出来たものと考える。今後も本研修を機に一層のJAAGAに対するご支援ご協力を頂ければ幸甚です」と述べられると共に、中西、石橋両副団長からも「空自、米軍及び地域が一体となって日本の防衛に取り組んでいる実態とそれぞれの絆の強さを感じ取ることができた」と感想を述べられる等、研修の準備及び実行に当たり多大なるご支援をいただいた日米受け入れ部隊関係者と参加者のお力添えと協力に対する謝辞をもって本研修は締めくくられた。

今回の研修は、空自及び米空軍双方から実に行き届いたご配慮をいただき、研修団にとっては実り多い有意義な研修となったことに改めて感謝します。

（早坂理事記）

三沢基地研修所感 ： Impression of Study Tour in Misawa

研修終了後、法人賛助会員である久保田光騎氏及び小井出諒氏の 2 名から感想文が寄せられたので紹介します。

法人賛助会員
三菱商事マシナリ株式会社
久保田　光騎　氏

2 月 27 日及び 28 日の 2 日間に渡り JAAGA 会員による米軍三沢基地等研修が実施された。これまでも何度か基地見学等にて部隊の方々のお話や現場を視察する機会があったが、本研修は米軍及び航空自衛隊の親切且つ誠意あるご協力により勉強になる事が多く、日米の部隊の方々のみならず研修に参加されている方々とも積極的な意見交換が出来た貴重な機会であった。

初日は航空自衛隊三沢基地研修であり、第 3 航空団司令からの概要説明、F-35 の離陸見学、航空自衛隊三沢基地の方々との昼食会、F-2 及び E-2C 見学、北部航空方面隊司令官講話など航空自衛隊としての三沢基地の歴史や有り方を見学した。夕食には日米の三沢基地の方々を交えた夕食会及び夕食会後の懇親会があり、多くの方々と業界に係る話のみならず、ざっくばらんな話もでき非常に有意義な会であった。

2 日目は米軍三沢基地研修であり、朝食から米国式であり、第 35 戦闘航空団司令部での講話、第 35 医療群研修、米軍機の F-16 及び F-110 エンジンの試験過程の見学等、日常の業務では経験及び学習出来ない研修を経験できた。

2 日間の研修を通じて、JAAGA の理事の方々による本研修の準備から当日の各 JAAGA 会員へのサポート、米軍及び航空自衛隊三沢基地の方々からの JAAGA に対する信頼は非常に強固であると感じた。

本研修を通じての学びは大きく 2 点である。

1 点目は三沢基地では航空自衛隊と米軍間の友好関係が非常に強く、トレーニング、基地施設の管理及び運用、地域コミュニティとの交流等積極的な協力が非常に印象的であった事。情報非公開の部分は有るものの、地域住民を含めた日米間の密接な協力関係を学んだ。 2 点目は業務上、直接部隊の方々のお話や現場を見る機会が少ない為、直接部隊の方々との食事や会話、機体の搭乗や見学、説明を航空自衛隊の方々のみならず米軍の方々からも受ける事が出来た事は日頃の業務では経験出来ない非常に貴重な機会であった。今後も現場の声を聞き業務に邁進したい。

One of the slides used in the USAF briefing to show good relationship

法人賛助会員
株式会社 シー・キューブド・アイ・システムズ
小井出　諒　氏

当社は、JADGE システム等の大型コンピュータシステムの維持・整備業務を担当させて頂いております。

さて、今回、初めての研修を通して色々と勉強させて頂きました。

特に米軍の方が地域住民の方々との繋がりを重要視して頂いている事が印象的でした。

私見で大変申し訳ないのですが、米国の方は体も大きい為、日本勤務に対する不安、というものが無いのかと思っていました。しかし、実際にお話を伺いますとそうではなく、過去に赴任経験のある隊員に日本はどんなところですか？安全な所ですか？という事を聞かれる方は少なく無く、日本に初めて赴任される方は日本に対しての不安を抱えて来るそうです。（また、任期は 2 ～ 3 年と短く、人の入れ替わりも多い様です。）

私には、不安を抱えながらも（精神的余力が少ない中でも）、限られた任期で人が替わり続けても、地域住民の方々と良好な関係を維持されている様に思えました。

なぜなら、三沢基地に駐屯されている米軍の方々が、地域住民の交流イベントを通して、積極的に地域の方々と良好な縁を結ぼうと行動していたり、緊急時の医療受入を行う等、単なる交流の枠にとどまらず、困った時にお互いが支えあえるような体制を組んでいる事や、地域の方々も米軍の方を温かく受け入れて下さっている等、お互いが歩み寄っているからこそ実現できる良好な関係が、そこにはあったからです。

特に、人の入れ替わりが激しい中でも、地域住民の方々と友好関係が結ばれているのは、米軍の中できちんとその文化が継承されている事の証拠であり、地域住民の方々を大切にしたいという気持ちの表れなのだと、私は感じました。

最後に、この度はこのような貴重な機会を頂き大変ありがとうございました。

普段見る事の出来ない環境や、実際に米軍基地で働く方の表情、考え方に触れる事が出来た為、より米軍の方を身近に感じる事の出来る良い機会となりました。

SPORTEX' 18B

SPORTEX' 18B, JAPAN - US friendship golf athletic meet

Under fine weather, 99 players, including 34 Koku-Jieitai members, 31 USAF members, and 34 JAAGA members, enjoy playing field meeting at Tama Hills Golf Course on Mar. 21

3 月 21 日（木）、JAAGA ゴルフコンペ「SPORTEX' 18B」が多摩ヒルズ・ゴルフコースにおいて開催された。当日は、低気圧の影響で雨が心配されたが天気は崩れることなくゴルフ日和となった。メンバー、天候、ゴルフコース、クラブハウス、食事、etc. 素晴らしい環境に恵まれ、円滑な運営のもとにプレーを楽しみ、親睦を深めることが出来た。

今回は航空自衛隊から航空幕僚長丸茂空将をはじめとして 34 名、米空軍横田基地から第 5 空軍司令部 A6 部長ワーダック大佐（Col. Randy Wardak ）をはじめとして 31 名及び JAAGA から外薗顧問をはじめ会員 34 名、総勢 99 名のプレーヤー並びに JAAGA から 1 名及び米空軍側から 2 名の運営ボランティアが参加した。

朝 5 時にゲートオープン、5 時半にクラブオープンと朝の早い立ち上がりにもかかわらず、続々と集合した参加者は、受付を済ませると銘々クラブハウスに準備された朝食をとりドライビングレンジで練習をするなど準備を整えた。

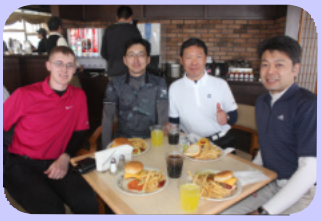
6 時半から開会式が行われ、主催者 JAAGA を代表して杉山顧問、米空軍横田基地を代表してワーダック大佐からご挨拶をいただいた。企画の上田理事から競技要領について説明、参加者全員で記念写真を撮影した後、ショットガン・スタート方式で各々のスタートホールから競技を開始した。18 ホール・スループレー、新ペリア方式の個人戦で行われ、真剣な中でも終始和やかな親善ムードでゲームを楽しんだ。

18 ホールを終えてクラブハウスに戻るとスコアを提出し、各組それぞれテーブルを囲んで昼食をとり、ゴルフ談義で盛り上がっていた。

ボランティアによるスコアの集計が終わると閉会式に進み、成績発表と表彰式が行われた。優勝は、中島会員（GRS95 HDCP27.6 NET67.4）で福井副理事長から賞品が贈られた。そのほか 2 位、3 位、ニアピン、ドラコン及びラッキー賞（飛び賞）にもそれぞれ賞品が贈られた。また、栄えあるベストグロスは、日本側は森下顧問（GRS78）で 5 空軍司令官賞が贈られ、米軍側はフィアニーさん（Mr. Tim Fearney）（GRS75）で JAAGA 会長賞が贈られた。

最後に航空自衛隊を代表して丸茂空将、米空軍を代表してワーダック大佐、JAAGA を代表して杉山顧問からそれぞれスピーチをいただき、本 SPORTEX' 18B が円滑に行われ、日米双方の親睦親善を深める機会になったことへの謝意と開催に尽力された米軍関係者と JAAGA 役員への慰労の言葉が述べられた。今後も友好と絆が一層深まることを祈念し、次回開催を期して終了した。（福永理事記）

(←↑) Opening remarks by JAAGA Adviser Sugiyama and Col. Wardak
(→) Informative briefing about rule by JAAGA Director Ueda



(↑)After playing of SPORTEX'18B, all players enjoy lunch
(↓)Winners have smiling faces at commendation ceremony

(↖)The champion:Mr.Nakashima
(↑)Best Gross:Mr. Morishita
(↗) Best Gross:Mr. Fearney
(←)Volunteers:
Taylor-san and Nakamura-san
Arigatou Gozaimashita!
(→)Closing Remarks:
Gen. Marumo, Chief of Staff, Koku-Jieitai

「平成30年度航空自衛隊英語競技会」米軍審査員の活躍

USAF officers support "Koku-Jieitai English Competition 2018"

USAF officers play important roles for Koku-Jieitai English Competition as judges and an actor

12 月 4 日（火）～ 6 日（木）、防府北基地において平成 30 年度航空自衛隊英語競技会が開催され、米第 5 空軍（横田）地域担当将校モリアリ大尉（Capt. Brittany Morreale）及び第 4 術科学校（熊谷）に勤務する米空軍将校キム大尉（Capt. Chehun Kim）の 2 名が、4 名の日本人審査員とともに審査にあたった。

両名は、ブリーフィング競技（幹部、准曹士の部）における質疑応答を含む審査、並びに通訳競技における審査及び在日米軍司令官役を担い、競技会になくてはならない存在として大いに活躍し、航空自衛隊を支援した。また、両名は競技中の質疑応答から競技終了後の JAAGA インタビューを通して、自衛隊のことを「Jieitai」と呼んでおり、「Koku-Jieitai」の呼称が米空軍にも定着してきていることが窺えた。

競技会後、両名にインタビューし、所感を聞くことができた。

【空自隊員の英語能力について】

Jieitai の英語能力の高さを強く印象づけられた。これは Jieitai において対話を通した日米関係の発展が重視されていることの証しである。ブリーフィングはハイレベルであり、通訳はとても素晴らしかった。共同訓練のみならず、あらゆる範囲の活動においてハイレベルの対話に対応出来る。

選手達は基礎的な英語レベルから訓練を始めたが、挨拶が出来る程度とは異なり、英語でハイレベルの会話が出来るまで大いに向上していることが印象深い。通訳時のアイコンタクトは、相手がフォローできているかをチェックする上で重要。

【発音、語彙、文法について】

全体を通して、発音は殆どの場合理解でき、たとえアクセントが違っても、理解を妨げるものではなかった。多くのプレゼンテーションで、発音はハイレベルであり、文法も素晴らしい。理解することに問題は無かった。ブリーファーの何人かはネイティブアメリカンと同等の素晴らしい発音であり、これには本当に驚いた。表彰式で紹介された女性幹部の発言はネイティブスピーカーレベルであり、我々一同を驚かせた。難しい軍事用語・政治用語があり、しかもハイプレッシャー環境の中で、皆健闘した。特に通訳競技は大いに印象に残った。何ヶ月かの勉強で、ここまでのレベルになれるとは驚きだ。

【質疑応答について】

発言内容は全体的に理解できたし、何人かは、期待以上に詳しく説明してくれた。メインアイデアを見失った者もいたが、彼らがごく初歩的レベルから始めたにも拘わらずトピックは軍における女性の役割、服務制度といったとてもハイレベルなものであったので、やむを得ない。

【空自隊員への英語力向上に向けたメッセージ】

臆病にならず、米軍人との会話に加わることを勧める。准曹士レベルにおいても、関係を構築するよう勧める。「日米相互特技訓練」はその意味において良い機会だ。英語に慣れることが必須。リスニングはテレビ番組や映画を観ると良い。スピーキングはパートナーが必要。多くの米軍人や日本で仕事・旅行をしている外国人と交流するのが良い。我々も日本人と友達になりたい。英語の勉強を兼ねて、日本の文化を教えては如何か。東京オリンピック・パラリンピックは、大きなチャンスだ。

【自身にとっての英語競技会参加の成果】

「Fukumu-Sido（服務指導）」の名称・意味はこの大会の導入説明で初めて聞いたし、女性の問題等の多様性は日米で異なるものであり、本競技会への参加は貴重な経験となった。もっと多くのブリーフィングを聞き、勉強したい。通訳競技における在日米軍司令官の役は広範囲のテーマで難しかったが、興味深く、自分も更に勉強したい。

Good job, Morreale-san and Kim-san !

このように、2 名の米空軍将校にとっても、審査員として空自隊員の英語能力向上の努力を間近に見るとともに、空自の各種施策や日本人の精神要素を理解する上で大いに意義があったことを知り、JAAGA 理事として嬉しく思った次第である。

（木村理事記）

（お二人は、JAAGA 懇親会にも参加された。）

（本競技会の概要については、つばさ会のホームページ（http://www.tsubasakai.org/）及びつばさ会だよりに掲載。）

特 集

米空軍将校 航空自衛隊勤務だより

Present circumstances of " Officer Exchange Program between Koku-Jieitai and USAF "

【 兵器管制部門 】
航空教育集団 第5術科学校
(5th Technical School, Air Training Command)
Capt. Christopher G. Fleissner

はじめまして。私はペンシルベニア州ピッツバーグ出身の兵器管制士官、クリストファー・フライスナー米空軍大尉です。私は現在、第5術科学校第1教育部教育第1科で勤務しています。

米軍の兵器管制及び作戦、そして一般的な米空軍の知識などを学生に教えています。また、5術校の英語教育を担当する2教部6科の教官とともに、英語での口述試験対策を行ったり、5術校の学生が空中給油機(KC-46)や日米共同訓練「レッド・フラッグ・アラスカ」などの様々なプロジェクトの下で米空軍と共同演習に参加できるように指導したりしています。小牧基地だけでなく、入間防空指令所、那覇防空指令所、奈良の幹部候補生学校や浜松基地にも出張しました。

中学1年生のときに日本語のコースを受講したのをきっかけに、私は日本に興味を持ち始めました。幸運にも、私が生まれ育ったピッツバーグ市は日本のさいたま市と姉妹都市関係にあり、日本を身近に感じていました。私は11歳のときに日本語を学び、高校に進学してからも日本語の学習を続けました。これは米国では珍しいことです。

Okinawa in 2001

私は高校を卒業した年の1999年に米海兵隊を志願し、4年間勤務しました。当時私は、沖縄に拠点を置いていた海兵隊第7通信大隊にネットワークスペシャリストとして配置されました。その間、「コブラゴールド」などの多国間演習にも参加しました。

沖縄ではキャンプ・ハンセン、キャンプ・コートニー、キャンプ・フォスターなどに駐留しました。この間、私は大学レベルの日本語の勉強を続け、日本と日本文化について多く学ぶためにあらゆる機会を利用しました。

沖縄に滞在した後、私は士官になりたいという願望があることに気付きました。そこで故郷に戻り、ピッツバーグ大学に復学しました。私は心理学の勉強を始めましたが、すぐにお金が尽きてしまいましたので、2005年に予備役として陸軍に入隊し、教育援助を受けることにしました。しかし、入隊後すぐに私は陸軍の現役として再配置され、イラクでの軍事作戦「オペレーション・イラク・フリーダム」に出発する準備を始めました。訓練中に、高機動多用途装輪車両を含む事故に巻き込まれ、両腕の神経を切断し、自分の部隊とともにイラクに展開することができませんでした。

Capt. Christopher G. Fleissner

その後、私は大学に戻り、2008年に心理学と法律の学位を取得して卒業しました。2008年の米国は、最悪の不況の真っ只中であり、私はほぼ6か月間仕事を見つけることができませんでした。私はあまり興味のない仕事に落ち着こうとしていましたが、ある日、ついに私が望んでいた仕事の1つから連絡をもらい、私は就職することができました。私は退役軍人たちの生活をより良くする手助けとなるよう、在郷軍人局で心理学研究員として勤務しました。

約1年後、紆余曲折を経て、私は米空軍の将校訓練学校(OTS)に入学し、2011年にはフロリダ州パナマシティのティンダル空軍基地にある米空軍の兵器管制課程を卒業しました。その後6年間、オクラホマ州オクラホマシティに位置するティンカー空軍基地で勤務し、「不朽の自由作戦」及び「生来の決意作戦」のため国外派遣されました。2013年にはアフガニスタンでの作戦にも参加しました。国外派遣から戻った後、私は一度ティンカー空軍基地に戻り、電子戦士官の資格を取得し、次はシリ

Visit to Iruma AB

Instructing Hamamatsu Advanced Officer Course on USAF Planning and Combat Ops 2019

With students at 5th Technical School

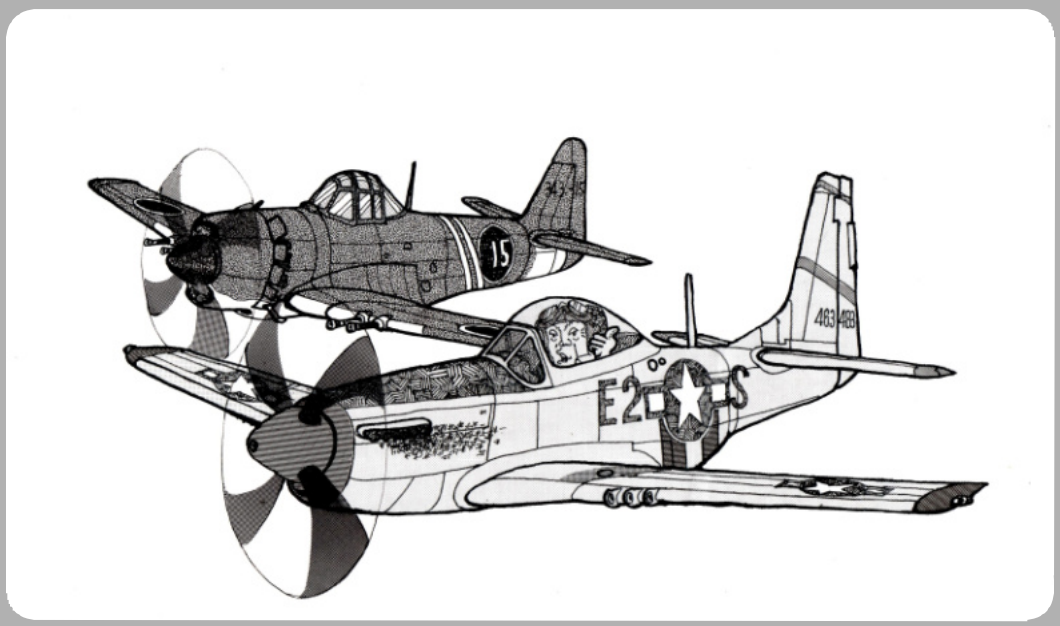
しいものですので、機会があれば、ぜひ訪れてください。

私は 2018 年 2 月に 5 術校に着任しました。私は静かに机の前に座り、米空軍での勤務のように周囲に気付かれずに仕事に取り組む自分を予想していましたが、予想に反して、私が今まで経験してきた中で最も温かい歓迎を受けました。5 術校での勤務を通し自衛隊が持つプロ意識や誇りを見ることができ、深く尊敬の念を覚えたとともに、隊員たちに対する敬意は収まることがありませんでした。特に印象深かったのは、私が教育を行った際の学生の取り組む姿勢が非常に熱心であったこと、そして、同僚である教官たちがより良い教育を実施するために日々努力し、改善に向かって精進する姿を目の当たりにできたことです。

私は、航空自衛隊と将来またともに任務に取り組むことを楽しみにしています。私が自衛隊の皆さんと過ごす時間は特別な思い出となり、これからも私の中に残り続けると確信しています。

アでの作戦に参加しました。一連の国外任務終了後、改めてティンカー空軍基地に戻り、電子戦士官の教官と評価員の資格を次々と取得し、次に前線に戻ったときには、早期警戒管制機に係る作戦立案部署の長兼電子戦専門部署の長としての派遣となりました。その後、私はこれまでの日本語経験を認められ、カルフォルニア州モントレーのアメリカ国防総省語学学校に入校しました。モントレーは美しい街です。年間を通して 15℃前後の温暖な気候で、毎日のようにクジラやアシカ、ラッコを見ることができます。美しいビーチと豊かな歴史は言うまでもなくすばら

Japan-America All-Star Game 15 Nov 2018, Nagoya Dome in Nagoya, Osu Kannon in Nagoya, Kyukokuji Temple in Nagoya, Ilumination at Nabana no Sato in Nagoya



「紫電改 & P-51」　　作: 富岡幹博会員

2019年度JAAGA事業計画

事業項目／実施時期			1／四	2／四	3／四	4／四
			4 5 6	7 8 9	10 11 12	1 2 3
日米隊員の激励等	日米共同訓練参加隊員の激励等			←→		
	日米隊員の表彰				←→	
	日米隊員の交流活動等激励			←→	←→	←→
日本研修の支援等	米空軍軍人の日本文化研修支援				←→	
	米空軍軍人の地域行事等支援	スペシャル・オリンピックス	横田 ↔	三沢 ↔		
JAAGAと空自・米空軍との交流	SPORTEX '19				A ←→	B ←→
	指揮官交代行事等への出席等			←→	←→	
	米空軍協会総会への参加			↔		
	在日米空軍各基地との連携強化			←→	←→	
	米空軍慶弔への対応				↔	
	関係団体との交流(JANAFA 福生横田友好協会)				←→	
広報及び広報協力	日米要人等の講演		○5／13			空幕部長等 ←→
	米軍基地等の研修				横田 ←→	嘉手納 ←→
	日米安保に関する広報活動	JAAGAだより	↔		↔	
	会報「JAAGAだより」の発行・配布		↔		↔	
	一般広報 ホームページ運営、パンフレット作成		←→	←→	←→	←→
総会等			○5／13			
運営管理	会員の拡大		←→	←→	←→	←→
	支部の活性化等		←→	←→	←→	←→
	組織基盤の整備等(事務所運営、備品の整備等)		←→	←→	←→	←→
	会員名簿の作成・配布				↔	
	役員会(★)、理事会(☆)		☆ ☆ ★	☆ ★	☆ ☆ ★	☆ ☆ ★
	監査		(H32.4)			

【 現役隊員の皆様へ 】

『JAAGA だより 』は、航空自衛隊の OB が作成し、航空自衛隊全部隊に配布しています。

航空幕僚監部はもとより各級部隊指揮官等、各級司令部の部課長等及び准曹士先任等、並びに、各基地等准曹会、日米相互特技訓練などを担当した部隊等及び記事を寄稿いただいた方々に、配布させていただいております。

また、米空軍、関係政府機関等にも広く配布し、現在の発行部数は約 1,700 部です。発行回数は 6 月下旬と 12 月下旬の年 2 回です。一人でも多くの隊員の皆さんに手に取って見て読んで楽しんでいただけるよう記事も工夫して行きますので、出来るだけ多くの職場に回覧していただくことをお願いします。

(JAAGA 理事会)

寄 稿 募 集 の 御 案 内

日米エアフォース友好協会(JAAGA)は、お蔭様で令和元年 7 月で創立 23 周年を迎えます。

日米同盟の深化進展に伴い、日米両軍の絆はより強固なものに発展してまいりました。

『JAAGA だより』も、JAAGA 活動の広報と空自、米空軍のサポーターとしての役割を、より一層充実発展させていきたいと考えています。

ご愛読の皆様からの投稿は大歓迎です。また、皆様の忌憚のない意見や感想も是非お寄せいただきたくお待ちしています。

【連絡先】

(郵便) 〒 160-0002 東京都新宿区四谷坂町 9 番 7 号 ZEEKS 四谷坂町ビル 3F

日米エアフォース友好協会 広報係

(メール) pubaffair@jaaga.jp

令和元年度 JAAGA 役員

※ 青：役職変更、赤：新任

職 名		氏 名
会 長		齊藤治和
副 会 長		平田英俊、 石野次男、 福井正明
監 事		阿部英彦、 日吉章夫
理 事	理 事 長	清藤勝則
	副 理 事 長	中島邦祐
	企 画	平本正法、 上田知元、 小野賀三、 荒木淳一、 平塚弘司
	総 務	福江広明、 岩成真一、 大浦弘容、 深瀬尚久、 長田国男 前原弘昭、 渡邊博史、 新谷和也
	渉 外	谷井修平、 阪東政詮、 吉田浩介、 岩本真一、 川口泰志郎 藤田信之、 村田圭史
	会 員	伊藤 哲、 西村弘文、 山倉幸也
	広 報	木村和彦、 福永充史、 池田五十二、 浅井 玲
	財 務	内山隆弘、 吉川礼史、 山本祐一、 大岩卓弥
支部役員	支 部 長	丸山 泰（三沢） 丸野礼治（沖縄）
	支部 事務局長	山本親男（三沢） 木村貞夫（沖縄）

顧 問	永岩俊道、 堀 好成、 岩﨑 茂、 片岡晴彦 小野田治、 山崎剛美、 杉山良行 四ツ家邦紀（ホームページ担当特任） 尾上定正（在米特任）

JAAGA 役員退任者

職 名	氏 名
顧 問	外薗健一朗、 森下 一、 渡邊至之、 長島修照
監 事	池田 勝
理 事	森田公治、 米沢敬一、 早坂 正、 渡部憲政

新 入 会 員 紹 介

正会員（Regular Member）

氏 名	住 所	氏 名	住 所
平塚 弘司	神奈川県川崎市	大岩 卓弥	埼玉県川越市
浅井 玲	東京都練馬区	西村 弘文	埼玉県川口市
相澤 司	東京都西東京市	山倉 幸也	千葉県茂原市
荒木 淳一	千葉県柏市		

個人賛助会員（Individual Associate Member）

氏 名	住 所	氏 名	住 所
太田 希	埼玉県所沢市	関 和郎	茨城県土浦市
佐藤 聰美	東京都世田谷区	浅見 純也	東京都福生市
小出 栄一	埼玉県狭山市	橋本 豪	東京都港区

会　員　募　集

○今期は、関係各位のご努力で、新たに正会員 7 名、個人賛助会員 6 名の合計 13 名の入会を得ることができました。
○1.5.31 現在、正会員数 259 名、個人賛助会員数 87 名、団体賛助会員数 2 団体、法人賛助会員数 36 社となっております。
○今後とも、会員の皆様の勧誘、推薦、情報提供に関するご協力、ご支援を是非とも宜しくお願い致します。
なお、本会への入会につきましては、次のとおりです。
推薦若しくは情報提供を頂いた方には、直接会員担当理事から連絡させて頂きます。

【入会資格】
正　会　員：航空自衛隊の OB
賛 助 会 員：航空自衛隊の OB 以外の方。正会員 3 名の推薦が必要です。
【連絡先】
郵　便　：　〒 160-0002
東京都新宿区四谷坂町9-7　ZEEKS 四谷坂町ビル3 F
日米エアフォース友好協会　会員係
メール　：　membership@jaaga.jp

【編　集　後　記】

◇「初春の令月にして、気淑く風和らぎ、梅は鏡前の粉を披き、蘭は珮後の香を薫らす」 日本人にとって特別な意味を持つ改元。新たな「令和」の時代が、平和で希望に満ちた穏やかな時代となりますように。
◇JAAGA は、「航空自衛隊と米空軍との相互理解及び友好親善の増進に寄与する事業を推進し、日米両国の信頼関係の向上に貢献する」ことを目的としています。会員・役員としての活動を通して、航空自衛官の現役時代にはよくは知らなかった JAAGA の意義を、機会あるごとにかみしめています。
◇JAAGA だよりは、そのような JAAGA の活動を広く知っていただく媒体として、会の目的達成の一翼を担う存在です。今後とも、正しいことを正しく伝えることに徹し、時に幅広く、時に深く、発信していきたいと思います。
◇JAAGA だより 56 号は、盛りだくさんの内容で 36 ページにもなりました。中でも、JAAGA 会員に対して発信された阿部空幕装備計画部長とシュナイダー司令官の講話は、個人、法人、団体それぞれの立場で日米現役隊員の皆さんをどう応援して行くか・何ができるかということを考える上で、示唆に富んでいるのではないでしょうか。
◇三沢基地研修に参加された方の中から法人賛助会員お二方の所感文を掲載しました。実地に感じたことが率直に表明されており、その気持ちは、日頃の業務に活きてくるだけでなく、日米現役隊員を勇気づけるものでもあるように感じました。
◇航空自衛隊英語競技会を審査員として支援した米空軍将校の活躍について紹介しました。かつての英語弁論大会は、現在は英語競技会となり、内容も日頃の業務に直結した実践的なものとなっています。F-35 の TO（技術指令書）は全て英文で書かれています。日米相互特技訓練は、年々充実度を増している様子が参加者の所感文からも伝わってきます。英語がもはや必須と言える航空自衛隊を米空軍人が支援し、同時に彼らも航空自衛隊員から学んでいることが、ご理解いただけたのではないでしょうか。

作：山本康正会員

◇今号の挿絵は、宇山佳男 OB から夏の風物詩、富岡幹博会員から「紫電改 & P-51」、そして元 JAAGA だより編集長の山本康正会員から「日々笑進」シリーズの 1 枚を寄稿していただきました。皆さん多才です。
◇広報理事は 2 名が退任、1 名が新任の新体制となりました。退任されたお二人の支援を受けてなんとか本号を皆さんのお手元に届けることができました。次号からはひとり立ちした新体制で編集を行いますので、今後とも、ご協力、叱咤激励をお願いします。　（編集子）